
Knight of Night **聖なる騎士の物語**

豆腐@顎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Knight of Night 聖なる騎士の物語

【コード】

N0497W

【作者名】

豆腐@顎

【あらすじ】

幻想都市、ゼノリアル。

その街に住む勝道 雄志はどこにでもいる平凡な高校二年生。

誰もが過ごす日常、どこにでもある日常。彼はいつまでもそんな中にいられると思っていた。

深夜、二時三十分。彼は目を覚ます。

そんな些細なことだったが、彼の日常は、確実に壊れていた・・・

序章

夜、それは闇。そして、闇は静寂を呼ぶ。

静寂とかすかな町明かりだけがある、午前三時。

そんな闇に包まれた幻想都市ゼノリアルの片隅に、この時間帯には不釣り合いな者がいた。

白いブレザーに身を包み、道路の真ん中で佇んでいる。

十五、六の青年であった。

「・・・さて、そろそろかな？」

ブレザーの内ポケットにしまい込んでいた携帯で、時刻を確認する。現在、三時五分。

彼は時刻だけを確認して、携帯を内ポケットにしまう。

すると、

ザ・・ザザザ・・・

耳にノイズが走る。集中しないと聞こえないほどの、微かな音。

だが、発信源がどこにあるのかは、何となくわかる。

「ジャストポイントだな。さっさと終わらすか・・・あんまり使っちゃこの体が可愛そうだ」

彼は発信源の方を向く。《何となく》の曖昧な感覚だが、どの辺りにいるのか、どれくらい離れているのか、それだけははっきりとわかる。

しばらく音の発信源を見ていると、赤い球体が姿を現す。

そして、瞬く間に、周囲の闇を吸い、一つの形となる。

「せっかくのんびりしてやったんだ。少しは楽しませてくれよ？来い、カリバーン」

右腕を真横に伸ばす。その動作に合わせるかのように、大きな何かが降ってくる。

それは、青年の背丈と同じくらいの大剣であった。

飾り気の無い白い刀身。その白い刀身から伸びる、もう一本の柄。

しかし、刀身には刃が付けられておらず、剣というよりは、鈍器に近かった。

そして、最も目を引き付けられるのは、刀身の根元、鏢に当たる部位である。

そこには、？眼？のようなものがあつた。直径三十センチほどの眼。薄く緑色に輝く眼。

彼は大剣の柄を握る。

それは少しだけ眼の光を強くしてこたえる。

「さてと・・・行くか！」

青年は闇に向かって走る・・・

午前七時三十分。

目覚まし時計が鳴り出す。

ベッドから手を伸ばし、手探りでその音源を探る。

電子音ではなく金属音なので、かなり耳に響く。

「う、うるさいなあ・・・もう少し寝かせてくれないじゃん」

自分でセットしておいて、目覚まし時計に文句を言う。

ようやく音源の時計の音を止める。

「うう・・・なんだかとも、眠い」

そうは言いつつも、このまま二度寝してしまつては遅刻してしまうので、しぶしぶ彼はベッドから這い出る。

彼の自室は二階にあつたので、寝巻きのまま、机の上に置いてあつた携帯と登校用の鞆を手に、リビングへと降りる。

携帯と鞆を机の下に置き、トースターにパンを入れ、冷蔵庫からイチゴジャムを取り出し、それをテーブルの上に置いて、洗面台へと移動する。

顔を洗い、うがいをしてから、リビングに戻り、パンが焼けるのを待つ。

待っている間はニュースを見る。最近は何の変死や通り魔事件が多いようだ。

「ま、どうせ関係ないよな」

パンが脱力感のある音と共に上に飛び出す。

それを取り出し、ジャムを塗って食べる。

食べ終わってから歯を磨き、寝癖を整えてから、三度リビングに戻る。リビングの服掛けから制服を取り、それに着替える。

テレビを消し、電気を切って、家を出る。

玄関から出ると、朝日が目に刺さる。

「今日も、いい天気だな」

太陽の日差しに、少し目を細めながら、そんなことを言う。

日常、こんな日常に、彼、勝道 雄志は生きている。

いつものように、学校に行って、授業を受けて、そして家に帰る。

そんな日常。

「なんか面白いことでもないかねえ？」

誰もが過ごす日常だからこそ、それに飽きてしまう。どこにでもいる高校二年生。

彼は自宅の隣の家の前で、立ち止まる。

現在七時五十五分。

「そろそろ、かな？」

携帯で時刻を確認して、それをポケットにしまう。

すると、

「じゃ、お母さん、行ってくるね！」

と、家の中からもいつも聞く声が聞こえてくる。

そして勢いよく玄関を開け、飛び出してくる。

「あ、ユウジ！おはよっ！」

「ああ、おはよーさん」

彼女は、月森 真美。彼の幼馴染である。

まんまるの大きな栗色の瞳と、右側サイドテールがチャームポイントの元気で明るい女の子である。

「いい天気だし、今日も楽しい一日になりそうだね！」

右手で光を遮りながら、空を仰ぐ。

「そうか？今日は授業に俺の大キライな数学があるからな。糞みたいな日になるだろうよ」

「それじゃ、週三日は糞みたいな日になっちゃうよ？」

「いいんだよ。みんなが生きてる日常だ。つまらなくて当然」

そういつて、歩みを進める。いつもの日常、学校へと。

「くう・・・眠い・・・」

現在午後三時二十五分。学校の授業がすべて終わり、クラス中の人間が急いで帰宅の準備をする時間帯。

もちろん、眠いとぼやいた彼も同じようにクラスの風景の一部として、帰宅の準備をする。

「よし、終礼すんぞ〜」

担任が教室に入ってきた。そのころには殆どの人間は帰宅の準備が終わり、鞆を机の上に置き、いつでも帰れるように支度をしていた。

「ま、連絡事項は特に無いな。今日の掃除は二班と四班だな。じゃ、解散」

と、担任が手をたたくと、全員一斉に立ち上がる。

「礼」

クラスの委員長に続き、全員で頭を下げる。

その後一斉に机を下げ、掃除当番以外はみんな一目散に教室から出る。

彼も人の波に流され、教室を出る。

「今日も、しょぼい一日だったな」

今度は流されないように、廊下の端へ寄る。

数秒もすれば、人の波は治まる。誰もが帰宅、または部活動に勤んでいるので、いちいち立ち止まる人は少ない。

なので、独り言を言っても、誰も振り向くことは無い。

「もう、あんまり否定的な言葉は言うもんじゃないよ？」

ただ一人、月森真美を除いて。

「うつせえなあ。いつからそこにいたんだよ？」

「さつきから、かな？」

その応えに、彼はまったく・・・と呆れつつ、

「まあいいか、さっさと帰るぞ」

返事を待たずに廊下を歩く。

「あ、ちよつと待ってよ」

そうして彼女もついてくる。

「ねえ、ユウジはさ、将来のこと考えてる？」

学校からの帰り道、真美はそう言った。

「将来？」

「そ、夢とか、やりたいこと」

俺たちも高校二年になり、もうすぐ夏休みに入る時期。そろそろ進路のことを考えてもいい時期だろう。

「そうだなあ・・・今まで適当に、流されるままに生きてきたし、別に考えて無くても大丈夫じゃね？」

特にやりたいことや、興味があることがあるわけでもないのだから考えると言われても、かなり困る。

「もう、ダメだよ？ちゃんとやりたいこと見つけなきゃ。人間はね、目標が高ければ高いほど、大きな力を発揮できるんだよ？」

「へいへいそうですね」

とりあえず適当に流す。

「ちゃんと聴いてる？ユウジ成績はいいんだから、ちゃんと将来のこと考えなきゃ」

なぜ成績がいいからと言って将来のことを考えなきゃならんのだ？

「べつにいいだろ？俺は今生きるので精一杯なんだよ」

「家で寝てばかりいるくせに。どうせなら騎士にでもなったら？」

「はあ？何が騎士だよ。バカバカしい」

俺たちの住む街、幻想都市ゼノリアル。数百年前までトーキョーと呼ばれていた街は、世界一の技術を生み出した。

それが、イマジニアリティと呼ばれるもの。

詳しいことは良くわからない。今も根強く残っている携帯と同じで、便利なものは『便利なもの』としか見ない。仕組みなど理解しているものは少ないだろう。

とにかく、イマジンリアリティというのは便利なもので、自分のイメージしたものを具現化するものなのである。

しかし、その便利なイマジンリアリティにも欠点があるらしい。それは、イマジンリアリティを行使する際、膨大なエネルギーが街の至る所に設置されている幻炉を通じて送られてくるらしいが、深夜帯になるとその幻炉が暴走してしまつらしい。

その暴走を止めるのが、騎士の仕事。

「大体なあ、こりや噂だぞ？今ネットで噂になつてるからつて簡単に流行に流されてたら、デジタルデバイス真つ盛りの世の中についていけないぞ」

「そんな、真剣にユウジのこと考えてあげてるのに……」
確かに、焦りはある。これから俺はどうなるのか、このままでもいいのか、そしてなにより、俺がやりたいことは、何なのか？
でも、焦りよりも、なぜか自信のほうが大きかった。

根拠なんて無い。それでも、自信があった。今まで流されるままに生きてきたんだから、そのうち《流れ》がやってくるだろう。それに乗れば、今まで通り、きつとうまくいく。そんな自信。

「大丈夫だつて。心配してくれんのはありがたいけどさ。ホントに心配しなくていいから」

そういつて、真美の頭を撫でてやる。こうすれば、こいつは少し恥ずかしくなつて、しばらく黙る。困つたときの俺専用の対処法である。

「もう……それでも、心配なんだよう……」
声が弱々しい。

「ま、だろうな」

そこで会話が切れる。

俺たちはそのまま、一言も喋らずに、自宅に帰つた。

午前零時。街が静かになってくる時間帯。

雄志はパソコンを立ち上げ、ネットサーフィンをしていた。一つのページを斜め読みしては、少しでも興味の沸いたページへ飛ぶ。

話題のアイドル、ホラー、事件、ゲーム・・・

かれこれ二時間はディスプレイを見つめていた。

「ぬう・・・さすがに目が疲れた・・・次のページのぞいたら寝よう」

スレッドのリンクを眺める。

その中の一つに、昼間話していた《騎士》の話題が上がっていた。

「・・・馬鹿か？こいつら、夢見すぎだろ」

おそらくこの話題に反応しているのは、彼と同じく日常に退屈している人間だろう。

「この日常が、どれだけありがたいか・・・」

彼は一度、非日常を経験している。

母を目の前で殺され、父はどこかに消えた。

今でも鮮明によみがえるあの光景。

「・・・クソッ」

頭を振り、切り替える。

携帯を手に取り、キーを操作する。

起動させたのは、イマジニアリティ。自らのイメージを具現化させる、魔法のような『便利なもの』。

具現化させたのは、家政婦。

「ご利用を」

留守電のときに出てくる女性のような声で、命令を求める。

「お茶を入れてきてくれ」

「かしこまりました」

一礼して、部屋から出て行く。

「コレが暴走でもすんのか？」

とてもそうは思えなかった。ただの迷信としか思えない。

約二分後に、お茶を持って来てくれた。

一気に飲み干し、コップを直しに行かせる。

「・・・ただの、噂だよな」

そう自分に言い聞かせ、ページを開く。

案の定、根も葉もない噂ばかりだった。

馬鹿でかい怪物と戦ってた。金髪ツインテール美少女だった。武器が巨大であった。等々。

「おいおい・・・お前ら落ち着けよ。現実はそんなに甘いモンじゃねえだろ」

誰かに伝わるわけでもないのに、ついつい呟いてしまう。

「何を警戒してたんだか。アホらし・・・」

そういつて、椅子から立ち上がり、パソコンをシャットダウンする。

「退屈で何も起こらないのは、平和である証なんだよ」

それだけ言つて、部屋の電気を消した。

午前二時三十分、勝道 雄志は目を覚ました。

特別何かがあつたわけでもないが、目が冴えて眠れない。

「明日、ガッコあるのに・・・」

仕方ない。と呟いて、部屋から出て一階に下り、お茶を入れる。

リビングの庭側の窓から、月明かりが差し込む。街中だと言うのに、いやに月明かりがまぶしく思える。

「月でも、見るか・・・」

特にやることも無いので、庭に出てみる。

他の家の電気は、ついていない。当然であろう。殆どの人間はこの時間帯は寝ている。起きている人間と言えば、徹夜で勉強する者、夜の営みをする者、特に何もしない者・・・

「何やってんだか。俺は中二病かつつの」

数秒月を見た後、恥ずかしくなってきた彼は、手に持っている飲み物を一気に飲み干し、リビングに戻る。

グラスをキッチンのシンクに置き、二階に上がろうと階段に向かったその時、インターフォンが鳴った。

「・・・え？」

体に電流が走ったかと思えた。何か変な感覚が体中を駆け巡る。

なぜこのような時間に？なぜこの家に？頭の中で様々な疑問が浮かび上がる。

「マミか？」

人間と言うものは非常事態を非常と認めたくない生き物なのである。ありえないことが起きれば、気のせいに行ったり、見なかったことにしたりするもの。

だから彼も同じように、非常ではあるが、最も起こりうる事態を予想してしまう。

「そんなわけないよな・・・あいつはお利口さんだからすぐ寝ちゃうし」

思考を巡らしているうちに、もう一度アレが鳴る。

「まさか、幽霊？」

とりあえず確認のため、玄関に向かう。ドアホンは不幸にも現在故障中なので、玄関ののぞき穴を確認することにした。

静かに、息を殺して、まるで大昔に実在していたらしい、ニンジャの様に。

いつもならリビングまで五秒とかからない廊下だが、二分ほど掛けて渡った。

のぞこうと思った瞬間、三回目のインターフォンが鳴った。

「!？」

驚倒し、体が凍りついた。足が震え、なかなか前に進めない。

ドアまで後一步だと言うのに、その一步が出ない。

心臓が激動する。胸の中で踊り狂っている。

この先に待つものは何なのか？人か否か。もし人でなかったら？仮に人だとしても、誰が？どう考えても、たどり着くのは、最悪の状況。

インターフォンが鳴る時間帯だけで、こんなにも緊張するものなのか。

「こんなことなら、もっと早くに治してもらうべきだった・・・」自分の耳でも聞き取れないほど、小さな声で呟く。耳から入ってくる音は何も無いはずなのに、ザワザワと五月蠅い。

固まっていると、ドアの向こうの何かに、連続で鳴らされる。汗が止まらない。

「クソ、こつちがビビッてたら調子に乗りやがって」
だんだん腹が立ってきた。少しだけ緊張が解れたが、まだ恐怖感が勝っている。

だが、彼も男だ。ここまで来て引き下がるわけには行かない。
まだ痺れが残る足を無理やり動かし、震えて筋肉が軋みを上げていた右腕をあげ、ドアノブに手をかける。

一度深呼吸をし、ドアノブを思い切りひねる。

「こんな時間に誰だコノヤロー！」
ドアを思い切り開け、叫ぶ。

しかしその一秒後には、彼は腰を抜かしていた。

「こんな時間に誰だコノヤロー！」

俺は、ドアを勢いよくぶち破り、叫んだ。

しかし・・・

「・・・は？」

俺は地面に尻をついた。驚きが約四十パーセント、安堵が五十パーセント、残りは疲れた。

「なによ？いきなり怒鳴りつけてきたかと思ったら、尻餅なんかついちゃって」

そこにいたのは、美少女だった。月明かりを反射して、少しだけ妖しく光る綺麗な金髪のツインテールに、炎を宿したかのような瞳。白く美しい肌。おそらくは、誰もが認める美少女だろう。

そんな風に見とれていると、

「ほら、さつさと立ちなさい。今日もオシゴト、行くわよ」

そう言つて、美少女が手を差し出す。ただそれだけの動作であるはずなのに、かなり上品に感じる。

「え？あ、ありがと」

彼女の手を借り、立ち上がる。もう緊張は無くなつていて、スムーズに立ち上がることが出来た。

地味に背も高いな・・・大体、百六十五センチ位か？

「てか、あなたまだ寝巻きじゃない！？早く着替えなさいよ」

「ええ！？あ、えーと・・・まあ、ちよつと待つてくれ」

そつだ、これから外に出るというのに、無神経にもほどがあるよな。

玄関から移動し、二階にある、自室で携帯を取る。

「ん？なんかおかしくね？俺、別に外に用事ないよな？」

一体さつきまで何を考えていたのやら。いきなり家に押しつけてきたのも、こんな時間に我が家のインターフォンを鳴らしまくつたのも向こうであり、無神経なのはあちらではないだろうか？

「・・・バカか俺はあああああああああ！！！！？」

頭を抱え思い切り叫んでいた。相手はこんな時間に押しかけてくる奴だぞ！？てかオシゴトつてなに！？まさか風俗紛い！？だとしたら俺お金なんて持つてないぞ！？でも、あんな綺麗な子と『いい事』できるなら高い金払つても・・・って何を考えてるんだバカか！？そうじゃないだろ！？いくら美少女だからってやっていいことと悪いことがあるだろ！落ち着け！落ち着け俺！素数を数えるんだ！

「1・2・3・・・」

そして深呼吸。

「ふう〜」

数秒目を瞑る。

自ら視界を絶ち、集中し、落ち着いて呼吸を整える。

「とりあえず、あいつから俺への敵意があるわけじゃないはずだ。

それに、話が分からない奴でもなさそうだな」

いきなり怒鳴りつけても怒らず、尻餅をついていた俺に手を差し伸

べてくれたことから考えれば、それは明確だろう。

まさか人違い？それもないはず。向こうは俺と面識があるような素振りだった。

「わからない・・・どう考えてもわからない」

俺が生き残れる道は二つ。このまま彼女について行き、オシゴトとやらを完遂すること、そしてもう一つは、もうめんどくさいからあきらめて寝ること。

「後者だな。断然後者だ」

なんだか疲れてきて、また眠くなってきた。これはきつと夢だったんだ。そう、夢なんだよ。

「だって、俺の家にあんな綺麗な子が来る筈ないもん」

それだけ言って、俺は暖かい布団にダイブした。

それから、五分もせずに、彼は再び目を覚ました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は何も言わずに、携帯を探し、時刻を確認する。

現在午前二時四十三分。

「くう・・・よく寝た・・・」

伸びをして、携帯のイマジンリアリティを起動する。すると彼の着ていた寝巻きは、たちまちどこかの高校の制服に変わった。

「しかしまあ、なんとも便利な世の中だなあ」

そんなことをつぶやきながら、彼は自室の窓を開け、そこから飛び降りた。

窓の真下は玄関口なので、着地点には先ほどの美少女がいた。

「おはようさん。今日もよく寝れたわ」

彼女に向かって、軽く手を上げる。

そのあいさつを彼女は不審に思ったのか、

「あら？さつき玄関から出てきたばかりじゃないの。まさかバグでも起こした？」

「はあ？何言ってるわけ？俺はさつき目覚めたばかりだぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
二人して沈黙。

しばらく黙っていた二人に、燕尾服を着込んだ白髪の老人が、話しかける。

「コトナ様。お時間です」

コトナと呼ばれた彼女は、そういえば、とつぶやき、老人に応答する。

「そうね、じゃ、行きましょうか」

そうして、彼と彼女は、家の塀の外に停めてあったリムジンに乗り込む。

「タナカさん、今日のターゲットはどこに？」

彼女はリムジンに乗り込むなり、運転席に座っている老人に問う。
老人は、

「座標はBの8でございます」
と答える。

「ここのとこ毎日だけど、位置が複数じゃないのが救いね」

彼女はポケットからタブレット型端末を取り出し、指でタッチし、地図で座標の位置を確認する。

「今日も楽そうだな・・・」

「油断しちゃダメよ？幻炉のエネルギーは無限に近いのだから。それにまだ相手のランクさえ分かってないわ」

「へえへえ、肝に銘じておきますよっと。てかさ、最近目覚めるのが遅くなってる気がするんだよなあ。お前なんか知ってる？」

それに、彼女は一瞬だけ体を強張らせる

「ここは知らないと言いたいけど、気のせいなんかじゃないわ。あなたは確実に目覚める時間が遅くなってる」

「ということは、始まってるとんだな？覚醒が」

彼は少し悲しそうに、すこしだけ期待しているような、なんともいえない表情を見せる。

「そうね。覚醒なんて、万に一つって聞いたけど、一番扱いやすい

性格のあなたが消えるなんてね、少し残念だわ」

「おいおい、こんな時くらい素直に、消えてしまっなんて淋しいわ、抱いて！とか言ってくれよ」

「今のが素直な気持ちよ。主人格は一度見たただけだけど、あんまり使えそうな子じゃないのよね・・・主人格には悪いけど」

「おいおい。でもさ、俺より力が引き出せるんだろ？だつたら大丈夫なんじゃねえの？なににせよ、俺が出てこなくなつたときは、こいつの事頼むぜ」

彼は自らの胸を親指で指す。

「自分が消えるって言うのに、こんな時まで主人格を優先するのね。あなたは」

呆れたように、彼女は言う。

「そういう風になつてるんだろ？ま、今夜が最後と思つて、気合入れるか」

彼は頬を両手で叩いた。

「さてと、今日もサクッとやっちゃいますか！」

リムジンから降り、勝道 雄志は伸びをしながら言う。

「最後になるかもしれないのに、もつたいぶる気は無いのね。そこは感心するわ」

続けてコトネも降りる。

「市民の命が懸かつてますからナ」

彼は腕を両腰の後ろに回し、わざとらしく言う。

「はいはい、何時如何なるときでも態度を変えずにふざけるのもあなたの良い所ね」

「ソレは褒めてねえだろ・・・」

そんな彼らの会話に、割って入り込むモノがあった。

ザザ・ザザザザザ・・・ザザザザザザザザ・・・

「やっとな来たか」

待つてたぜ。と言いつつ、音源の方を見る。

「今日も、人間の中に潜み、人々の畏怖の神に為ろうとする者を、
私たち神の候補が、討つのね」
彼女は言う。それは何かの呪文のようなものでもあり、口癖のよう
なものでもあった。
刹那、世界は闇に包まれた。
「聖戦の始まりだ！」

第一章 はじまり その1

無限世界。

そこは、終わりも始まりも、色でさえも無い世界。当然、そこには生きている者も無い。

しかし、そこに当然のように住まう者たちがいる。

「ちゃんと集まってくれたみたいだね。どうやら本当に暇なようだね、神っていう存在は」

「暇なわけではない。この世界は狭く、そして広いからな。どこからでも声は聞こえるし、どこにだって移動できる」

お前ももう知っているだろう？と、どこからともなく声は響く。低く、腹の底に響くような、中年男性のような声。

「でもさあ、ソウシが来るなんて珍しいね。ここには確かに存在するものがある、それは退屈だって意味不明なコト言って、ソレきりココに来なかったのに……」

今度は、少年の声がした。

それに、唯一姿を見せている、ソウシと呼ばれた人型が、

「下のほうで面白いことがあってね、僕の所持しているナイトの一人が、シフトしたよ」

「つまり、私タチの観測カラ、抜ケ出シタと？」

今度は女性の声。

「ああ、そうだよ。もう暫くすれば、覚醒するだろう。ジョーカーとして」

神のくせに、予測するなんて、すこし奇妙だね。彼はそう付け加える。

「そういうものだよ。我々は人間たちよりも一つ上の世界に住んでいる。下のはすべて視ることが出来るが、同じラインに立つと、急に視えなくなる。お前のおきもそうだった」

「そうだね、人からすれば神かもしれないけど、ここにいる僕らは

そんな存在じゃないよね」
それだけ言って、人型はその世界から消えた。

月森 真美の一日は伸びから始まる。曰く気持ちがりセットして今日も一日元気に行こう！という気分になるらしい。

だから今日の朝も同じようなことをする。

「ん……くう……」

思い切り伸びをして、ベッドから出る。

そして彼女はもう一度伸びをして、部屋を出る。

「父さん母さんおはよ〜」

いつものように笑顔で朝のあいさつをし、朝食が用意されているテーブルのイスに座る。

そしていつものように朝食を食べ、いつものように歯を磨き、いつものように髪を整え、いつものように学校に行く準備をする。

「ここまでいつもどおり……」

携帯で時刻を確認し、そろそろユウジが来る時間だな。と、家から出る。

「じゃ、母さん行ってくるね」

いつものように靴を履き、いつものように母に手を振って、いつものように玄関の扉を開け、外に出る。

「あれ？ユウジまだなのかな……」

もう一度携帯の時刻を確認する。

現在七時五十五分。いつもならこの時間には幼馴染である勝道 雄志は自宅の前で待っているはずなのに。

「むう……どうしよう」

朝のホームルームまであと三十五分ほどある、そして、自宅から学校までは二十五分から三十分ほどかかる。なので、彼を待てる時間は五分ほどしかない。

「一応、メールしとこう」

もう一度携帯を開き、メールを雄志に送る。

先に行つとくネ

「・・・ちよつと恥ずかしい」

彼とはあまりメールをしないので、どんな文章を送ればいいのか迷つてしまう。

「ま、いつか」

時間も無いので、メールをそのまま送り、学校へと向かう。

学校についても、雄志は居なかった。彼のクラスにも、廊下にも

「大丈夫かなあ？」

もう一度メールを送ろうとしたとき、チャイムが鳴った。

「うっ・・・タイミング悪いなあ」

そうばやきながら、彼女は教室へ向かった。

少しだけいつもと違う日常。いつもそこにいるはずの人が、少しの時間でも、いない。

なぜかこのことが、彼女は不安で仕方なかった。

午前十一時四十六分。雄志は目を覚ました。

「遅刻つてレベルじゃねーぞおい・・・」

彼はここまで来たら後は同じだと考え、まず昼食をとってから学校に行くことを選択した。

「てゆうか、携帯のアラームちゃんとセットしたはずなのに」

そう言いつつ、携帯を開く。

携帯には、メールが三通届いていた。

「ママか・・・」

三通とも彼の幼馴染、月森 真美のものだった。

午前七時頃のもの、三時限目が始まる前と終わる頃の時間。

「とりあえず返信しとかないとな」

今日は遅刻です。

件名にそれだけ打って、送信ボタンを押す。

「あゝ、なんだったんだらうなあ？夢？もしかして体外離脱つてやつ？」

昨夜のことを思い出す。

「ま、思い出したりして真実がはっきりするわけじゃないんだけどさ」

そう言つて、出来る限り思い出さないようにする。正直、気になつて仕方ないが、考えても仕方が無いので、気にしないように努力する。

「とりあえず、飯だな。その後にガッコいくか」

現在一時二十分。そろそろ五時限目の授業が始まる頃だ。

「しんどいなあ・・・」

正門をくぐり、ため息をつく。遅刻なんてかなり久しぶりだ。

「理由、寝坊とかで許してもらえるかねえ？」

すこし心配だが、気にせず昇降口まで行くことにする。

当然、人はいない。我が高校には、授業中にフケるような輩はいない。

「ま、進学校だもんな」

そうつぶやきながら、靴を履き替え、今度は職員室にむかう。

職員室の前に、遅刻カードがある。そこに遅刻した理由と、今後の意志を書かなければいけない。正直、後者が存在する意味が分からない。

「ま、テキストに書くか」

ボールペンを握り、すらすらと擬態語が出てきそうな勢いで書いていく。

「こんなもんか」

遅刻した理由 大寝坊

今後の意志 目覚ましに期待します

その紙を持って、教室まで上がる。

「おはようございます」

授業中であることも気にせず、普通に教室に入る。

「やっと来たか、何やってたんだ？」

まあとりあえず遅刻カード出せ。と古典を担当しているこの二年三組の担任、坂本が言う。

「いやあ、昨日いろいろありまして」「
そういいながら、カードを渡す。

「お？ユウジまさか、月森といちゃついていたんじゃないのか!？」
俺の席の隣に座っていた斉藤が茶々を入れる。

奴がそんなことを言うので、周りがざわついてくる。

まじかよ、盛んだなあやら、俺は信じてたぜとか、ぱねえっす、勝道さんばねえっすなど。

中にはサイテーなどという声もあった。

「ちよ、ふざけんなお前ら！無駄なときに団結すんな!」

俺の制止により、声だけは収まった。

それでも、みんなの視線が痛い。普段はまるでバラバラなクラスであるが、よく変なところで団結してしまう。担任曰く、そこがこのクラスのいいところでもあり、悪いところでもあるらしい。

その静寂をを、担任の坂本が破る。

「ま、元気なのはいいことだ。でも、男ならちゃんと責任取れよ?」

「いやだからそうじゃなくて・・・」

「フー！やるねえ!」「いよっ！大統領!」「それ古すぎんだろ、

お前いつの時代の人間だよ?」

そんな風に、また教室が騒がしくなる。

「もう、どうにでもなれ」

数分もすれば静かになるはずだ。この学校の生徒はだいたいそんな風に出てくる。なぜなら、みんなレールの上を歩いてきた人間だから。指示通りに動き、少し外れてもまたレールの上に戻る。そんな人間たちなのだ。

俺も、そんな人間の一人。自ら動くわけでもなく、ひたすら誰かがさした《最良》の道を選ぶ。

「ま、そんなもんだよな」

俺は暫く続くであろうこの騒がしさの中で、小さくつぶやいた。

放課後、午後三時三十五分

「あゝ、しんど……」

一日の疲れを解き放つように、伸びをする。コレがすばらしく気持ちが良い。

「五時限目から乱入してきたくせに、よく言うな」

と、斉藤が突っ込みを入れる。

「うっせえな、昨日いろいろあったんだよ」

そう反論すると、

「やっぱり月森とやってたんだろ？盛んだのう？」

「ざけやがって……そんなことより、今日の分のノート貸してくれよ。明日ちゃんと返すからさ」

話を遮り、授業の遅れを取り戻すためにノートを強請る。

「しゃゝねえなあ。ほれ」

そう言つて、四時間分のノートが渡される。

「マジサックス。そろそろマミもホームルームが終わった頃だろうし、迎えに行くかな」

「やっぱりアツアツじゃん」

「幼馴染だし、一緒に帰ってやらなかったら後で何言われるかわからんからさ」

それだけ言い残し、教室から出る。

真美のクラスは隣の二組なので、教室で待っていれば、すぐに出てくる。

「あ、ユウジ来てたんだ？」

「メールで送つたろ？今日は遅刻ですって」

「まあ、そうなんだけど、少し心配で」

そして、心のそこから心配してましたといわんばかりの表情を見せる。

「なんか、悪かったな。よし、帰ろうぜ」

とりあえず謝つてから、その場を去ろうとする。みんなの視線が痛

すぎる。

「あ、ちょっとまってよ〜」

それを真美が追いかける。とてとて、と効果音でもついでるんじゃないかと思うくらい可愛らしい歩き方で。

「あゝ、暇だなあ」

帰り道の途中、彼はぼやいた。

「じゃあさ、今日ユウジの家泊まってもいい？」

隣にいた幼馴染が、顔を覗かせながら話しかけてくる。

そういえば今日は金曜日だったな、と思いながら、

「却下」

彼は即行で否定した。

「ええ・・・なんで？」

「そんなの決まってるだろ。俺たちもう高校生だぞ。神様、仏様が許しても、お前んとこの母さんが許さないだろ？」

そう、彼らはもうお年頃の高校生。間違いが起きても不思議ではない、所謂？お年頃？なのだ。

「なら、お母さんが許可してくれたら、今日泊まってもいい？」

と、自信に満ち溢れた顔で、彼に持ちかける。

「ツハ、出来るもんならやってみるよ」

彼は小馬鹿にしたように笑う。

その態度に、彼女は少しだけムキになって、「むう・・・」と言いつつながら、携帯で電話を掛ける。

彼は空を見上げる。どうせ出来やしないのさと、心の中で彼女に言い聞かせる。

確かに、泊まりにきてくれればいいとも思う。なかなか美少女の幼馴染とドキドキの同棲生活が、擬似的にでも出来ようものなら、少しでもこの日常から逸脱できるかもしれない。

そんな風に思っていた矢先、

「え!?!いいの!?!やった!?!」

携帯で話していた月森 真美が、それを耳に当てたまま歓喜の声を上げる。

そしてそのまま、

「じゃ、今日泊まるね!」

「うそだろ・・・」勝道 雄志は思わず呟いた。

「そうと決まれば準備しなきゃ!早く帰ろ!」

真美は雄志の手を引き、走って家に向かう。

手を引かれ、走ったまま、彼は大きく、長く、これ以上ないくらいのため息をついた。

第一章 はじまり その2

無限世界。

「確かに、これは観測することが出来ない」

男の声が響く。だが、姿はどこにも無く、映像だけがその空間に存在していた。

その映像には、十六歳の青年が移っている。

何の変哲の無い映像のはずだが、その？何の変哲の無い？ことが、彼らにとつての異常だった。

「それに、すでに確立に干渉しているのか・・・」
どこか悲しげに、声は響く。

「まあ、望むのはこれ自身か。私達は、ただ見守ることしか出来ないのだからな」

そして、この世界からすべてが消えた。

午後四時二十五分

「わあ、なんだか久しぶりな気がするなあ」

私が一番最後に雄志の家に訪ねたのは、中学三年生の頃だった気がする。

家はお隣さんなのに、雄志は二年もこの家に入れてくれなかった。

何となく理由は分かる。だって、ここは雄志のお母さんが殺され、

お父さんが消えた場所だから。

あの時から、何も変わってないな。

「ほんとに、変わってないね」

別に言おうとしたわけじゃないけど、無意識のうちに言ってしまう。

「は？今なんて？」

「え？ああ、別に何も無いよ？荷物は、どこに置いたらいいかな？」

そう言つて、鞆を少し持ち上げる。そして、小首をかしげる。雑誌に、モテる女の百の動作つてタイトルで、載っていた気がする。

「そうだなあ、着替えとかもあるんだろ？だったらとりあえずリビングにでも置いとけ」

「なんだか素っ気ない返事だなあ。すこしでも、照れてくれてもいいのに。」

「うん、分かった」

そのままリビングに向かい、荷物を置く。

「何しよっか？」

「あゝ、そうだなあ。まだ四時だし、お前がいなきゃ昼寝してたとこなんだけど、どうせこのままでも暇だし、外にでも行くか」

おそらく何気なく言った言葉なのだろうけど、私は凄く不安になった。

一瞬だけ、顔が歪む。でも、笑顔を作り、

「あ！デート？やった！」

手を勢いよく合わせる。音はパン！なんて鳴らしたら可愛らしくないから、出来るだけぼんに近づけるように努力する。これも例の雑誌に載っていた。

「ん？どうでもいいけど、あんまり引っ付きすぎるなよ？中学ん時に見つかってすげえ面倒くさいことになったの覚えてるだろ？」

デートと言つ言葉になにか引っかかっているような素振りを見せながら、雄志が釘をさしてくる。

「なんで？いいでしょ？周りの目なんて気にしてたら生きてけないよ？」

不安を一生懸命抑える。せつかく楽しいことをしにいくのに、しみりした空気でいきたくない。

「はあ・・・もういいや、行くか。飯は外で食うから、金は用意しとけ」

「はゝい」

返事をして、おろした鞆から、財布を取り出す。

少しだけ、ドキドキしてきた。雄志とどこかに遊びに行くのも、なんだか久しぶりな気がする。

中学生までは、お互いに余裕があった。だからいつものように遊ぶことが出来た。

でも、高校生になってから、いろいろ忙しくなってきた。でも、遊べる時間が減ったわけじゃない。課題なんかも多いけど、夜に片付けられるレベルだった。

だから、私よりも頭がいい雄志は、私よりもっと余裕があるものだと思ってた。

私より優秀な雄志は、何をするにも私より上だと思ってた。

それは、もしかしたら間違いだっただのかもしれない。人に見えないようなところで、私にさえ見えないようなところで、雄志は努力しているんだと思う。

だから、私の数倍は忙しいはず、なんて思ってた。

「それも、違うんだよね・・・」

思わずつぶやいてしまった。

「は？何が違うんだよ？」

「ユウジはさ、私と居るの、ヤなの？」

言ってしまった。こんなこと言うつもり無かったのに、しんみりな空気は嫌だなんて思っておいて、自分でそんな空気を作ってしまった。

「え？」

そして、沈黙。

「うっん！なんでもない！早くいこ！ユウジとの時間は、待ってくれないもんね！」

再び笑顔を作り、手を握る。

「ほら！ポーっとしてないで、早く行こ？」

「あ、ああ。そうだな」

そう言っつて、雄志は付いてくる。私は、この手を離さないように、強く、強く握り締めていた。

何故こんなことになったんだろうか？

幼馴染に手を引かれ、外に駆け出す。

「ちよ、ちよっと待ってっ！」

強く握られているので、振り払おうにもそうすることが出来ない。力づくで振り払うこともできるが、いくら幼馴染だといっても、女の子に乱暴するなんて、とてもできない。

「ん？なに？」

真美は笑顔で振り返る。でも、心からの笑顔にはどうしても見えな

い。

「あ、えーと・・・ホラ！行き先、決めてないじゃん？」

どうにか、尤もらしい言い訳に持っていった。

「あ、そういえば、そうだったね」

じゃ、どこ行く？と真美が切り出す。

「そうだな・・・とりあえず、ココアにでも行ってみるか」

ココアはこの辺りでは一番大きなデパートで、よくカップルなんか

を見かける。

真美は甘くておいしそうなおデザートだね。と言っていた。

「そっか。じゃあとりあえず行こ」

とりあえずを強調され、再び手を引かれる。

違う。そうじゃない。

俺が言いたかったのは、家を出る前のこと。

『私と一緒に居るの、ヤなの？』
どうして？なんで？そんなことを言ったのか。気になって仕方が無い。

もしかしたら、傷つけてしまったのか？

全く心当たりが無い。

今も真美は俺の手を引いて歩いている。

決して振り返ることなく、歩を進める。

「ホント、どうしてこうなった」

声を最小限に抑えて、俺はつぶやいた。

午後七時三十二分。

デパートで時間を潰し、適当な店で夜食を済ませた俺たちは、真っ直ぐ家まで向かっていた。

「・・・・・・・・・・」

妙な沈黙が続く。デパートについて、時間がたつ度に、真美は少しずつ話さなくなっていた。

「気まずい、気まずすぎる。」

「あ、え」と、なんだ

さすがにこんな状況には耐えられないので、どうにか切り出す。

「公園、行くか。ガキン頃によく行ったところ」

「・・・・・・・・・・いいよ」

それだけだった。昼間はあるに元気だったのがウソのようだ。

それから、一言も話さず、公園に着いた。

「なんとというか、変わってねえな」

滑り台、鉄棒、ブランコ、ジャングルジム。ありきたりな遊具が視界に入る。

どの遊具にも、所々錆が付いていて、なんだか寂しい気持ちになる。

「あの時は、あんなにキレイだったのになあ」

鉄棒を撫でるように触りながら、そんなことを言う。

しかし、感傷に浸る間もなく、真美はベンチに座る。

それを追うように、俺もベンチに座る。

「・・・・・・・・・・」

またしても沈黙。

「えーと、なんだろうな。こういうのってさ、ちょっといいよな。二人の思い出の場所ってカンジでさ」

自分でも何を言ってるのやらさっぱりだった。別に付き合ってるわけでもないのに、何恋人面しちゃってんだよ。と、今の俺に小一時間説教してやりたかった。

「・・・・・・・・・・」

今の真美も、きっとそう思っているに違いない。大体、俺から付き

合っていない宣言をしてしまっているのに、本当に俺は何を言っているんだろう。

「ユウジにとつてさ、私のことなんかよりも、寝ることの方が大事なんだよね」

いきなり真美がそう言った。

その言葉を聴いた瞬間、心の底から安堵した。

何気なく言った言葉だった。

だから、俺は

「なんだ、そんなことか」

真美の頭を撫でながら、そう言っただけ。

「え？」

真美は、可愛い目をまんまるにさせて驚く。

「そっか、無自覚とは言え、余計な心配させたな」

なんだか、とても嬉しかった。あんな何気ない言葉で、傷ついてしまっくらい、こんな俺なんかを想ってくれているのかと思うと、胸が温まる。

「最近、お前と一緒に遊んでなかったもんな」

「ごめんな。そう言いながら、優しく、頭をなでてやる。」

「ユ、ユウジの・・・ばかあ」

「私、ほんとに、不安になったんだよ？このまま、ドンドン離れちゃうかもって、本気で思ったんだから・・・」

真美の気持ちがあんなに伝わってない訳じゃなかった。むしろ、俺も同じ気持ちだ。

でも、まだ伝えるわけにはいかない。だって、そのままじゃあまりにも普通すぎるから。というより、いざとなると緊張してうまく言えないだろうから。

「まあ、なんだ。すこし、カラオケにでも行くか」

このまま家に帰ったんじゃ、三時間ちよつとが無駄になる。

「でも、もう晚いし、今更行っても・・・」

「今さらじゃないんだよ。今からでいいんだよ」

立ち上がり、少し伸びをしてから、真美に手を差し出す。

俺の中でも、何か吹っ切れた。こんな日常がつまらないとか、そんなことは無かった。なぜなら、俺にとってなにより大切な日常が、すぐそばにあったから。一緒に居るだけで幸せになれる相手がいるのに、それをいつしか見失っていた。

「ホラ、いくぞ！」

今度は俺が真美の手を引く。時々振り返りながら、真美が笑顔かどうかを確認しながら。

午後十一時。

「いや、久しぶりに歌ったなあ」

カラオケから家に帰り、玄関に入るなり、雄志は思いっきり伸びをする。

「うん、やっぱり思いっきり歌うと、気持ちいいね！」

それに合わせるように、真美も伸びをする。

「ま、先に風呂入ってこいよ」

リビングに入り、冷蔵庫に入っていたコーラを取り出しながら彼が言う。

「じゃあ、一緒に入る？」

「却下」

「え〜！？そこはもうちょっと恥ずかしがるところじゃないの!？」

「どうでもいいから早く入ってきなさい」

雄志は手で早く行けとサインをする。

それに彼女はばつの悪そうな顔をして、風呂場に向かう。

「……つぶはあ！」

コーラを一気に飲み干し、グラスを台所にシンクに置く。

「……はあ」

雄志はため息をついた。

「多分あれ、夢じゃないよな？」

昨夜のことを思い出す。浮かんでくるのは、とても綺麗な女の子。

なぜか緊張する。逃れられないことは分かっているがそれを必死に忘れようとしているときのような、そんな緊張感が彼を襲う。

暫く、考えていた。もし今日来たらどうするか、断るか、否か。

「普通に考えれば、断るよな」

しかし、納得がいかない。なぜあんなことになっていたのか。それだけが気になつて仕方が無かつた。

「あの子は、俺のことを知ってるよな素振りだったし・・・」
何をどうすればあのようなになるのか、不可解極まりない。

「もしかしたら、現実には考えられないようなことが起こつてたり？」

とりあえずソファアに座り、テレビを点ける。

「ま、テレビでも見て落ち着こう」

それから、真美が風呂から上がるまで、彼はずっとテレビを見ていた。

午前二時。

「たしか、三十分ぐらいだったよな」

俺は静かに、その時が来るのを待っていた。

真美は風呂から上がるなりすぐに寝てしまったので、かなり暇だったが、此処まで来ると早いものだった気がする。

「でもまあ、どうすっかなあ？」

いまだに答えは出ていない。

「関わるとヤバそうではあるけどなあ」

かなり緊張する。たかが三十分が、いやに長く思える。

もしかしたら、命に関わるようなことかもしれない。もしかしたら、恋愛シミュレーションゲームの新ジャンルのようなことになるかもしれない。

「できれば、後者がいいな」

とりあえず三十分間、一人しりとりや腕立てをして過ごした。

二時三十分。携帯のディスプレイが時間を示す。

「そろそろ、か」
なぜか落ち着いてくる。

静寂

静寂

静寂。

そして、それをインターフォンが破る。

「来たか・・・」

玄関に向かって歩こうとしたが、

「そっいや、また寝巻きだった」

一応風呂には入ったので、着ている服は当然のごとく寝巻きだった。

「ま、取りに行くのも面倒だし、イメージリアリティ使うか」

携帯のメニュー画面から、イメージリアリティを起動する。

適当な服を思い浮かべ、それを現実にする。

「これでよし」

再び玄関に向かって歩き出す。

玄関前に立ち、一度深呼吸をして、

「今夜も来るんだな」

そう言いながら、ドアを開けた。

第一章 はじまり その3 (前書き)

とりあえず、一章はこれでラストです。

その3から、だいぶペースは落ちてしまいましたが、二章以降はもつとおそくなると思います。

出来るだけ一週間に一話投稿を目指します。

第一章 はじまり その3

「こんばんわ。と言っても数時間で朝になっちゃうから、おはようの方がいいのかしら？」

目の前にいる美少女が、少しだけ迷った顔をする。

「ま、どうでもいいけど。アナタ、ユウジの方よね？」

言っていることの意味はよく分からないが、

「ああ、俺の名は勝道雄志、勝利の道を往き、真の男を志す者だ」と、人差し指を軽く立て、右手を挙げながら肯定する。

「そう、まあノコノコ出てきたんだから、着いてくるってことでいいのね？」

彼女の後ろには、漫画でしか見たことがないような、リムジンが一台停められていた。それを親指で指しながら、

「出来れば私に着いてきてもらいたいわ」

なぜかお願いしているようには見えないが、そう頼んできた。

「行ってもいいんだけどさ、その、一つだけ教えてほしいことがある」

「いいわよ？この私が何でも説明してあげる」

どんと来いと言わんばかりに胸を叩く。何かちょっと可愛い。

「え〜と、君はオシゴトって言ってたけど、もしかして危険なことだったりする？」

「もし、そうだと答えたら？」

「正直言つと、嫌だよ。でもさ・・・」

声が、震える。当然、足も。

昨夜は、どうにかなったけど、今夜はそうもいかないような気がしてならない。

根拠も、自身も無い。でも何か、ここでやらないといけないような、罪悪感にも似た感情が、今の俺を支配していた。

「俺、やるよ。多分、このままじゃいけないと思うからさ」

「協力してくれるのね？」

そう言っつて、手を差し出す。

「役に立つかは分からないけどな」

その手を取る。とても暖かく、すごく心地がよかった。

「なら、行くわよ。アナタの気が変わらないうちに」

そして俺と彼女は、リムジンに乗り込んだ。

止めておけばよかったかもしれない。そうすれば、俺の日常は保障されていたのかもしれない。でも、今はこれでいい。？流れ？に任せて生きていただけの俺が、やっとまともに選んだ道なんだから。

午前二時三十五分。

「え？じゃあ俺っつて今まで一年もこんなことやってたの？」

リムジンの中で、俺は衝撃の真実を知った。

「そうよ、人格は違うけど、アナタの体を使わせてもらってたわね」

「うわ、なんか怖え・・・」

それしか言葉が出てこなかった。俺とは違う人格が、俺の体を使って深夜に好き放題やっているところを想像したら、身の毛もよだつと言っただけ。

「あれ？じゃ、俺っつてあのまま寝ててもよかったんじゃ？」

「それはもう無理ね。アナタはもう覚醒したから」

「カクセイ？」

「そ、簡単に言っつと仮人格はもう目覚めないようになっちゃったっつこと」

「じゃあ、それっつて・・・」

俺がこれからずっとこんなことをするということの意味してるんじゃないかなろうか？

「何を今更・・・」

彼女は心底呆れたようにため息をつく。

「読心術!？」

「顔に書いてあるわよ、明らかに嫌そうな顔したもの」

「んなアホな」

「そんなことはどうでもいいけど、もうすぐ到着よ。アナタは初めてだろうから見てるだけでもいいわ。そんなに甘い相手でもないけど」

「そりゃありがたいな。いきなりやれなんて言われても、多分出来ないだろうし」

そして、リムジンが停まる。

「さて、行きましようか」

彼女はさっさと降りてしまう。

彼女の背を追うように、俺もリムジンから降りる。

「そういえば、君の名前聞いてなかったんだけど」

「あ、そういえばそうだったわね」

彼女はこちらに振り返り、

「私の名前はコトナ。で、主人格の方は天道琴葉っていうのと、コトナは胸に手を当てる。」

「これからアナタがお世話になるだろうから、よろしくね」

「お、お世話になります」

なにか納得いかないが、まあ事実だし仕方ないかな。

「そろそろね、いい？私の言うことには絶対に従いなさい。そうすれば死なないから」

「お、」

OKと言おうとした時、

ザ・ザザ・ザザザザザザザザザザザザザザ

ノイズが走る。とても小さな音だが、なぜか聞こえてくる。

「なんだ？この音」

「来たわ・・・神器を呼びなさい」

「ジンギ？」

「私達の武器よ。アナタのはカリバーンっていうの、名前を呼んであげるだけでいいから」

その後、コトナはスサノヲと呟いた。

そして、左手に白い巨大な何かが現れる。

真っ白で、六つに線分けされた、彼女の身長程ある刀身、そして、
紅い眼でも付いているのかと思わせるような柄。それはどう見ても
普通の武器ではない。

「何かすげえのな」

「さつさと呼びなさい！来るわよ！」

その瞬間、

ばああああああああああああああああああ！！！！！！

「！？」

轟音が鳴り響く。

「な、なんだよ！？」

疑問を持たずにいられない。

本能が、逃げろと催促する。

「私達の討つべき対象、ナイツよ」

そこにあつたのは、形を持った闇だった。形を見る限りは、四足獣
といったところだが、どう考えてもこんな生物がいるわけがない。

「でかすぎんだろ！？」

おそらく全長五メートルはあるだろう。

「ボサツとしない！！早く呼びなさい！！！！」

コトナが怒鳴る。

一瞬驚いて、声も出なかったが、

「こ、来い！カリバーン」

目の前に、巨大な大剣が降ってくる。俺より少しだけ大きい大剣。
真っ白な刀身には、刃が無く、一本の溝を中心に不規則に溝が広が
っていた。

その刀身からは、もう一本柄が伸びている。使い難そうには見える
が、二本目の柄は腕二本分はずれているので、持つ分には支障無さ
そうだ。

そして、スサノヲにもあつたような眼は翠色で、どこか懐かしい感
じがした。

「つてうわっ！地面に刺さってんじゃん
ばああああああ！！」

そうしている内に、闇はすぐそこまで近づいていた。

「刺さってるんですけどお！？」

俺は自分でも何を言っているのかわからない悲鳴を上げた。

「足引つ張ってんじゃないわよ！」

コトナがスサノヲで闇を裂いた。形的には顔に当たる部位を捉えていた。

「おお、やったんじゃね？」

「さつさと抜きなさい！まだ終わってないわ！」

言われるがまま、指示に従う。

数センチほど刺さってしまったが、さほど力は要らなかった。

「これめっちゃくちゃ軽いな」

その大きさには似合わない重量感で、プラスチック製なんじゃないかと疑う。

「説明は後でするから！かわしなさい！」

闇は大きな前足を振りかぶり、俺たちを切り裂こうとしていた。

「うおお！？」

どうにかそれをかわす。

「こいつはエノクね。ただの雑魚よ。でも、やっぱりそんなに甘いやつじゃないわね」

コトナはあたりを見回す。

深夜で暗いのは当たり前だが、街灯が点いてないわけじゃない。だから、足元や、目の前には何があるのかが分かる、はず。

「暗すぎるんだよな？」

前を見ても、後ろを見ても、在るのは闇。普通なら、建物や電柱が見えるはずなのに、そこに在るのは闇だけだった。

「囲まれてるわね、十体くらいかしら？」

正直、もう帰りたい。俺もう絶対死ぬじゃん……

「大丈夫よ。もうすでに一体終わったから」

気付けば、先ほどまで目の前に居た闇は消えていた。また考えが読まれていた、でも、そんなことにいちいち突っ込んでいられない。「いい？私の言うことは、何があっても実行しなさい。じゃないと死ぬわよ」

死。それが怖い人間なんて、おそらく居ない。なぜなら、死は人間にとつて最大の抑圧だから。人間は死を減らすために技術を進化させている。

まさに、今の状況が、そうだ。こいつらに死を与えられるより先に、それを回避するだけの技術を身につける。それが、俺の生きるための選択。

「それはいいけど、無理難題は止めてくれよ？」

「大丈夫よ。まずは、カリバーンの眼を押しなさい」

「眼つて、これだよな？」

翠に光る眼のようなものを押す。

「キャスト・オフって言いながら、剣を振りなさい」

「え、えっと、キャスト・オフ！」

それにあわせて、剣を水平に振る。

『cast・off!』

神器から、男性の声が響く。

そして、刀身が、八つほどのパーツになり、飛散してゆく。

そこから出てきたのは、これまたシンプルな刀身で、半分に分けるように掘られている溝だけしか特徴がなかった。

「まさにキャスト・オフじゃん。サナギ状態のワームならこれでやれるんじゃない？」

その飛散したパーツが、五体のナイツに当たる。

それはやつらの体を貫き、やがて速度を失い、地面に落ちる。

「巧くやれたわね。さすがに全部つてわけじゃないけど、これで半分ほどに減ったわ」

体を貫かれたナイツたちは、黒い霧状になって消える。

「まじでやれちゃったよ・・・」

感激している間もなく、

「あと四体だから、気を抜かずに行くわよ！アナタは私の背中を守ってくれればいいから」

そう言つて、コトナは目の前に居たナイトに向かって走る。

「ちょ、それはさすがに無理難題だと思っけど!？」

他の三体は、コトナに向かって走り出している。

ばうぁおおおお!!

そのうちの一体が、コトナを目掛けてジャンプする。

「あ、危ない！」

走ろうにも、足が動かない。

足が震えている。正直、こんなやつらの相手するなんて、とてもじゃないが出来ない。今かばいに言っても確実に死ぬだろう。だから今は動けない。

『cast・off!』

そう聞こえて三秒と経たない内に、三体のナイトは消えていた。

「足引つ張るなって言っただでしょ？」

コトナは、いつの間にか二本の太刀を持っていた。右手に、先程持っていたスサノヲと同じデザインの刀身を持つ刀、左手にはスサノヲの眼から二本の刀身が真っ直ぐ伸びている刀。

「いや、さすがにあいつらの相手すんのは無理だつて！」

「はぁ・・・まあいいわ」

ため息を漏らしながらも、残り一体になったナイトの攻撃をすべて避ける。

そして、俺の元まで一気に跳躍する。

「とりあえず、ナイトの倒し方を教えてあげるわ」

もうここまで来てしまうと、何が起こってもあまり驚かなくなってきた。

「よく聴いてなさいよ？一回しか説明しないから」

そう言っている間に、ナイトは俺たちに迫ってくる。

「ナイトは基本的に死なない。ただのエネルギーの集合体だからね」

ばうあ！

飛び上がって、コトナの首筋目掛けて前足を振るう。

「でも」

コトナがナイツを切りつける。

「私達がいいつらを倒せたのは、コアを壊したからなの」

コトナは右手で持っていた刀を地面に刺す。

そしてスサノヲの眼を押す。

「ストライク・クラッシュ」

『strike・crash!』

二つの刀身が、真っ紅な光を放つ。

コトナはスサノヲを振るう。

紅い粒子を撒き散らしながら、美しい軌跡を描き、目の前のナイツは消し飛んだ。

六号球ほどのバスケットボール大の赤い珠を残して。

「そして、これがコア。アナタがキャストオフしたときも、ちょうどこれを壊せたの」

「コア・・・こいつを壊せば、ナイツってのは消えるんだな？」

「そうよ。今回はエノク相手だったから楽勝だったけど、他の上のランクだと、そう簡単にはいかないわ」

話しているうちに、コアに黒い霧が集まってきた。

「再生が始まつてるわね。コアは早く壊さないと一分もしないうちに復活するわ」

「だったら説明しないで壊してくれよ、怖えな」

コトナは、コアを軽く上に投げて、スサノヲで真っ二つにする。

綺麗に切れたはずなのに、粉々に砕け散る。

「こんなところね。また詳しい話は後でするわ。家まで送ったげるから、乗りなさい」

その直後に、コトナの真後ろにリムジンが停まった。

「もう、いろいろとすごいわ」

これで、俺の長い長い夜は終わりを告げた

第二章 おとうさん その1

午前三時五十分。リムジン内。

「足引つ張つてホントスミマセンしたっ！」

勝道 雄志は、頭を下げだした。

「そんなに謝らなくてもいいわよ。どうせこうなるだろうと思ってたし」

「そんな一言がとても痛いです・・・」

今度はうな垂れる。

「事実だし仕方ないでしょ。そんなことよりも、アナタに説明しなきゃいけないことがあるの」

そんな彼の行動は軽く流し、コトナが切り出す。

「す、スルーっすか」

それすらも無視し、彼女は続ける。

「アナタは今日、神になる権利を得たわ」

「は？」

唐突に、神なる権利がどうのこうの言われてもいまいちピンと来ない。

「カミつて、アレだよな？毛じゃないほうだよな？」

「毛じゃないほうつて・・・まあそうだけど、それは上のヒトたちに失礼でしょう？」

「だってそれ以外思い浮かばないし」

「はあ・・・」

全くこのバカは・・・とでも言わんばかりに、彼を見下す。

「まあいいわ。とにかく、権利を得た以上、アナタはこの先劇的な変化を味わうことになるわ。いわば、神に為るための試練って何かしら？」

「もつすでに、この状況が劇的なんですけど・・・」

「どうでもいいわよ、アナタごときの価値観なんて。ま、とにかく

覚悟はしといてねってこと」

「ひどいっす・・・コトナさんまじひどいっす」

しばらく立ち直れなかった彼だったが、

「そういえばさ、ナイツってのは、どこから来てんの？」

と、一つ疑問を浮かべる。

「別に来てなんかいないわ。ただ現れてるだけよ」

「ふーん、宇宙からの侵略とかじゃないんだな」

「ただのエネルギー体って言ったでしょ？」

あの時は彼なりに必死だったので、彼女の言っていたことは指示と、コアを壊せばあいつを倒せることしか覚えていない。

「エネルギーか・・・どこから来てんの？それって」

「簡単に言えば幻炉ね。アナタもイマジニアリティぐらい利用したことがあるでしょ？」

「まあ・・・そうだけど・・・」

彼は、どこか似たような話を耳にしたことがあったような気がした。幻路、巨大な武器、そして美少女・・・

「思い出した！これって都市伝説じゃん！」

先日見た掲示板のことを思い出す。

「？まあ、どうでもいいけど、その幻路からあまったエネルギーと、人のもつ最も強い思いを元に、ナイツは出来上がるの」

「ことごとく俺の言うことがどうでもいいことになってるけど・・・人のもつ最も強い思いって何ぞ？」

「そのまんまの意味よ。大抵は恐怖ね。トラウマなんかはナイツの元になりやすいわ」

恐怖、トラウマ。その言葉を聞いた瞬間、彼はあの出来事を思い出した。

もう、何年も前。何度忘れようとしても、それは決して忘れられない。

「へ、へえ・・・トラウマ、か・・・」

その時、

「ユウジ様。到着いたしました」

と、リムジンを運転していた白髪の五十台ほどの老人が言う。

「あ、ありがとうございます。わざわざ送ってもらって」

それに、老人は軽く会釈し、

「これも仕事ですので」

と返す。

「詳しいことを知りたかったら、ここに来て頂戴」

携帯に地図情報を保存させる。

「わかった。昼ごろに行ってみるよ。じゃ、また」

そっぴいながら、彼はリムジンを降りる。

「今日は疲れたな・・・」

俺は、一度疲れをリフレッシュするため、伸びをした。

これになかなかすつきりして気持ちいい。

「・・・ただいま」

声を潜めながら、家に帰りを告げる。たぶん、親に内緒で遊びに言

って帰ってきたときは、こんな感じなんだろう。

でも、それを怒ってくれるような親は、もう居ない。

「何考えちゃってんだか・・・眠いし、もう寝よう」

携帯を開き、イマジニアリティを解除する。すると、服が二時間

ほど前の、寝巻きに戻る。

「二百五十円か・・・」

料金だけ確認して、リビングのソファに横になる。

現在四時三十分。おそらく誰もが寝ている時間帯。

「最も強い思い、？恐怖？か」

それだけ言って、目を閉じる・・・

・・・過去。それは人の思い出と、文献によって構成される。過

去の人が未来に伝えようと、いろいろな手段で過去を残す。

俺にも、過去というものがある。誰だってそうだから、俺だけ特別

なんてことはないんだけど、少しだけ、みんなと違う過去を、俺は

持っている。

あれは今から十年ほど前。

「おとーさん、おかーさん」

僕は、リヨージンを呼ぶ。リヨージンは、お父さんと、お母さん二人のことをいうらしい。

深夜、目が覚めてしまったてなかな眠れなかったのを、今でも覚えてる。

だから、僕はお父さんと、お母さんが寝ている部屋に向かったんだ。僕は二階で寝ていたから、一階まで降りて、リビングを歩いてリヨージンの

寝ている部屋に向かう。

できるだけ、音を立てないように、ゆっくり、ゆっくり戸を開けた。キィという少しだけ嫌な音を立てながら、ドアが開く。

「おとーさん、おかーさん」

僕は、またリヨージンを呼ぶ。

「どうした？眠れないのか？」

するとお父さんが目を覚まして、手招きしてくれた。

とても、幸せだった。家族三人で、いつも一緒に居た。それだけで十分だった。

「うん・・・」

もう六つになるから、少し恥ずかしいけど、まっくらの中に一人で居るよりは、リヨージンのぬくもりを感じながら寝るほうがいい。僕はお父さんの方へ行く。

「まったく、仕方ない子だなあ。ユウジは」

お父さんは、僕の頭を撫でてから、僕をだっこして、ベッドの真ん中に置く。

こういうジョウタイのことを、カワノジっていうらしい。

「大丈夫。ユウジは、お父さんと、お母さんが絶対守ってやるからお父さんは、僕が寝るまで、ずっと起きててくれた。

ずっと、こんな日常が続くと思っていた。俺が立派な大人になる

まで、父さんも、母さんも、ずっと俺を支えてくれるものだと思っていた。それが、あんなことになるなんて……
このころの僕は想像さえしていなかった。

また、眠れない夜がやってきた。

雨がザアザア音を立てながら、家の屋根に降り注ぐ。遠くの方でゴロゴロ……と音が聞こえるから、たぶん雷雲なんだろう。

眠れない夜、こんなときは、リョーシンとカワノジで寝るのが一番いいと思う。

なんだか、怖いから。守ってくれるリョーシンがいないと、不安で仕方がないから。

「おとーさん、おかーさん」

そう言いながら、ドアを開ける。

階段を下りて、リビングを通る。

そして、ドアノブを握って、回す。

キィィ……あいかわらず、いい気分になる音じゃない。

「おとーさ……」

言葉が出なかった。一瞬、いや、十数秒ほどは夢だと思っていた。

お父さんが……お母さんを、壊していた。

「なんで？」

ギモンを持たずにはいられない。

どうして、父さんが母さんを殺すのか？そのことだけを考えていたと思う。肉を裂かれ、ただの肉片と化した、いままでお母さんと呼んでいたモノ。

それだけを見つめて、

「やめてよ……おとーさん」

お父さんは、止まらない。まるで何かに操られているように、目を紅く、紅く光らせながら、お母さんを壊していく。

一瞬、部屋の中が明るくなる。雷が鳴る。

「……壊したい。ナニモカモ、全部、コワシタイ」

お父さんが、こっちを向く。不気味に笑いながら、コワス、コワス。とだけ言っている。

「足りない、マダダ、まだ足りない。コワシタリナイ」

お父さんは、音も立てずに立ち上がる。

そのまま、一歩ずつ、ゆっくりと歩いてくる。

「お、おとーさん・・・？」

一歩、近づく。

とても小さな音ではあるが、聞こえる。確かに聞こえる。死へと近づく音が。

一歩。

一歩。

一歩。

一歩。

一歩、近づく。

「コワスコワスコワスコワスコワスコワスコワ」

生きている心地と言うものは、わかっていなかったけど、正にこの時は、生きた心地という物がしなかった。

声が出ない。大きな声を出さなきゃ死んじゃうのに、どうしても出ない。

お父さんが、ゆっくりと右手を上げる。その手には、大きなナイフが握られていた。

死。

紅い目を光らせ、壊すことしか考えてないような目で、僕を睨む。

そして、

部屋が一瞬明るくなる。とても大きな音がしたから、また雷が落ちたんだ。

もう、どうでもいい。

目を瞑って、あきらめていたのに。

俺は、死ななかつた。雷が落ちた後、どういうわけか、父さんは姿を消していた。

第二章 おとつさん その1（後書き）

次のお話は、九月十三日から十八日を予定しています

第二章 おとうさん その2

無限世界。

「まだ完全にはシフトできてないみたいだよ?」

何もない世界に、少年の声が響く。

「過去ノ干渉ヲ確認。まだ第一段階ト予測シマス」

今度は女性の声。

「まあ、まだ始まったばかりだからな。ソウシの予測では、もうすぐ動き出すらしい」

そして、野太い男性の声が響き渡る。

「でもさあ、ほんとに起きるのかなあ? 聖戦なんてさ」

「どういう事デスか?」

「この世界の管理者であるはずの僕たちが観測できないんだよ? この状態でもし聖戦が起こるなら、この世界ごとシフトしてることになるよね?」

その声は、どこか不安を感じさせた。

「その先には、何があるんだろうっね?」

それきり、声は響かなくなった。

「.....」

ゆっくりと、目を開ける。

「そりゃまあ、夢だよな」

体を起こし、壁に掛けてある時計を見る。

現在、五時二十四分。

凄く長い夢を見ていた気がするのに、まだ一時間ほどしか経っていない。

「父さん・・・母さん・・・」

後ろを振り返る。

俺が座っているソファのメートルほど後ろには、テーブルがあり、

そのまた後ろ、約三メートルに、ドアがある。

そのドアの向こうが、さつき夢に出てきた部屋。この家に帰ってから数年間、一度も開けたことが無い。所謂、開かずの間。

「うんっしょっ」と

ソファから立ち上がり、そのドアを目指す。まあ、数秒でたどり着いてしまうけど。

大きく息を吸い、

吐き出す。

ドアに手をかける。

「・・・入るよ」

誰が居るわけでもないのに。俺は何を言っているんだろうか。

きい

少し劣化しているのか、音は低くなっている気がした。

変わらないところと言えば、聞いていて気分がいいものではないところ。

部屋の中は、何も変わっていないかった。二人が寝るためのダブルベッド、小さな机と小さなライト。味気の無い部屋。

「父さん、母さん」

十年前のあの光景なんて、まるでウソだったかのように、何も変わっていない。

それでも、あの事実は変わらない。俺の頭にしっかりと刻み込まれたあの記憶は、おそらくどうやっても取り消せない。

できれば綺麗さっぱり忘れたい記憶なんだが、それと同時になぜか忘れたくない気持ち、俺にはあった。だって、この記憶を忘れてしまえば、父さんと母さんの事を全部、忘れてしまっただから。

今では、そう思っている。

「うう・・・」

少し気分が悪くなってきた。あの事を思い出すと、いつもこんな風に気分が悪くなって、吐きそうになる。

今日は、全然寝てないというのもあるので、一段と気分が悪い。

だから俺は、トイレに駆け込んで、胃の中のものを全部吐き出した。

トイレから出て、口を洗面台でゆすいでから、リビングに戻る。ソファに腰掛け、テレビをつけてみる。もう五時半を過ぎてしまっている。大したもののは放送していなかったが、随分落ち着く事が出来た。

「ふわあ〜・・・」

間の抜けた感じのあくびが出る。落ち着いたらまた眠くなってきた。テレビを消して、ソファに横になる。すぐに、意識は消えた。

「ん〜！よく寝た」

月森 真美は体を起こす。窓のカーテンを開け、一日の始まりを確認する。

「今日もいい天気！きつといい日になる！」

体を思いっきり伸ばして、一日の始まりを体感する。これが彼女の一日の始まりにする行動で、曰く、これをしないと一日元気に頑張れない。らしい。

「そういえば、ここで寝るのは、何年ぶりになるのかな？」
今乗っているベッドを、軽く撫でる。

「ユウジのお母さんたちが居るときは、よく来てたのに・・・」

彼女は幼馴染の顔を思い浮かべる。昔は凄く臆病で、女の子の私より怖がりだったなあ。なんて思う。

「今じゃ、全然違う子みたいになっちゃたな」

いつも一緒なのに、とても寂しい気持ちに駆られる。心に大きな穴が開いた気分がした。

「ま、大丈夫だよ。ユウジはユウジだもん」

そうは言ってみるものの、不安で仕方がない。

本当は、昔の彼に戻ってほしい。臆病だからこそ、人のことを心から愛したり、優しくしたりできる、昔の雄志に。

「やっぱり、仕方ないこと、なのかなあ？」
真美は、窓から太陽をのぞいてみる。太陽は、みんなを平等に照らしていないのと同様に、この世界も、みんなが平等にはならないななどと、彼女は思った。

「そういえば、ユウジはどこで寝たんたる？」

気になって仕方がなくなってきた。もしかしたら、迷惑をかけちゃったんじゃないか？なんて思えてきた。

「とりあえず、下に行かないと」

ベッドから降りて、部屋を出る。そして、階段を下りて、リビンググに出る。

「ユウジ・・・？」

雄志は、リビンググのソファで寝ていた。そんなに大きいソファじゃないから、足がはみ出ていたり、落ちそうなくらい狭そうなのが、とても寝苦しそうだった。

「ちょっとだけ、迷惑かけちゃったかな？」

でも、少し寝苦しそうに寝ている雄志が、昔の雄志と似ていた。

「ちっちゃいころも、よくあんな顔してたな」

なんだか懐かしくなってきた。昔の思い出が、全部蘇ってくるような気がした。

雄志の体を少し起こして、

「ユウジ、軽すぎじゃない？」

なんて言いながら、作ったスペースに腰掛ける。雄志の頭をゆっくり下げて、太ももに乗せる。

すると、雄志の顔が少しだけ緩やかになった。

それが、とても愛おしく、キスぐらいしても大丈夫なんじゃないかな？なんて思ってしまう。でも、体勢的にキツイ部分があるから、それはやめておく。

「なんだか、恋人同士みたい」

頭を撫でながら、そんなことを言う。まだ雄志は「恋人とかそーい

うのは早い」なんて言ってるけど、もう十六歳同士なんだから、付き合うぐらいは普通だとおもうけど・・・

「でも、今のままでも、いいかな？」

恋は、この時期が一番楽しいんじゃないかな？だって、ゲームやアニメも、ゴールしたらそこで終わっちゃうもん。だったら、暫くはこういうドギマギした感じのほうが、？らしい？んじゃないかな？なんて、思ってしまう。

「でも、心変わりしないうちに、応えてね」

返事はない。もうすっかり気持ちよさそうに寝ている。

今は、これを見れるだけで十分だった。

第二章 おとうさん その2（後書き）

そろそろ物語りも動き始める頃です。正直に言うと、これからどうなるかは全く分かりませんが、もちろん、エンディング等の重要なところは考えているのですが、それまでの過程は白紙だったりします。これから勝道くんは何を見て、どう選択するのか、読んでくださる方は、何卒応援、よろしくお願いします。

次回の更新は、来週の夕方ごろになると思います。（変更する可能性大）

第二章 おとうさん その3

午前十一時二十八分。

俺は、真美に膝枕をしてもらっていた。

「え？おかしい。お前それはおかしい」

そして俺もすこしおかしい。

「なんで真美に膝枕されてるわけ？」

「えつと・・・なんでだろ？」

真美が分からなかったら、一体誰がこの状況を理解するのか。突っ込みたい状況ではあったが、とりあえず体を起こす。

「はあく、無駄にしんどい・・・」

ソファから立ち上がり、伸びをする。相変わらず気持ちが良い。

「ユウジ、まさか夜更かししてた？」

「ま、まあ、そんなとこかな？」

その上金髪美少女と一緒に黒い巨大なやつらとバトルしてました。なんて言えるわけが無い。

「そんなことよりさ、俺昼から用事あるから、昼飯食ったら帰れよ」

「え〜？あたし聞いてない」

「だって言ってなかったし」

ひどい！など言っている真美を尻目に、昼食の用意をする。

「カップ麺でもいい？」

「よくないに決まってるでしょ？どうせなら一緒に何かつくろ？」

そう言つて、冷蔵庫を開ける。

「今作れるのは、オムライスぐらいじゃね？ほとんどスツカラカンだろ？」

「ほんとだ・・・ユウジちゃんと食べてるの？」

「一応な」

「だめだよ？ちゃんと食べないと。なんなら、私が毎日作りに行つてあげようか？」

卵を持ちながら、俺の隣に寄ってくる。

「それもいいかもな」

まんざらでもなかったので、肯定しておく。

「ホントに!?! やった! えへへ・・・なんかこうしていると、夫婦みたいだね」

それに、俺は、静かに頷く。

昨夜のことが、信じられないくらい普通の一日。神になる権利がどうこう言っていたあの出来事が、かなり懐かしく感じる。

「真美と居ると、つくづく平和でいいな」

なんてことを言って、料理の手を進める。

「ふいい〜」

オムライスを間食し、満腹感に満たされる。

「あ、あのさ。さっきのつて、ホントなの?」

真美が不安そうに尋ねる。

さっきのとはおそらく昼からの用事の件だろう。

「まあ、ホントかな」

「今日じゃなきゃ、ダメなの?」

「結構・・・というかなかなり重要な用事だからさ。出来ればはずしたくないんだよ」

約八時間ほど前にした約束だけど、俺のこれからに関わる事なので、出来る事なら早く知りたい。

「そっか・・・じゃ、仕方ないか、な?」

この二日間で、真美の落ち込む姿をよく見るようになっている気がする。まあ、ほとんど俺の所為なんだろうけど。

「そんなに落ち込むなよ。多分すぐ終わるし、明日も休みなんだから、夜に来てくれれば良いさ」

「いいの?」

「いいもなにも、そんなにでかい鞆で用意されてちゃ、断るにも断れんわ。どんだけ気合入れてんだと」

と、リビングに置きっぱなしだった真美の鞆を指す。

「う・・・だって、久しぶりにユウジの家に泊まるんだもん。あれもいるこれもあるってなっちゃおうよ」

恥ずかしかつたのか、真美は顔を赤らめる。そんな仕草に、俺は少しドキッとしてしまう。

だから、俺は時計を見る。現在、十二時三十分。

「さ、さて。そろそろ行くかね。鞆は重いだろうから置いていても良いけど、服とかは洗濯するような奴は出来るだけ持って帰れよ」

真美はそれに「はい」なんて、返事を返す。それを聞いてから、二階にある自室に向かう。

「随分、久しぶりに帰ってきた感じがするな」

昨日、というか今日で色々ありすぎて、マイルームがとても懐しく思えた。

「とりあえず、着替えなきゃだな」

「ちょっとだけ、寂しいかも・・・」

せっかくお泊りに来たのに、いきなりお開きだなんて。

「まあ、夜からまた来ても良いって言うてたし、少しだけガマンしてあげようかな？」

そうは言っても、どこか不安だった。このまま、ユウジを放っておいたら、どこか遠くへ行ってしまいそうな気がした。

とても、とても愛おしい人。いつまでも、大切にしたい人。どんなときでも、想ってもらいたい人。それが、雄志なんだ。

たぶん、向こうもそう思ってくれている。はず。

「自分で考えるのも恥ずかしいけどね」

自分の頭をコツン、と叩く。不安になっちゃダメ。と自分に言い聞かせる。

「大丈夫、だれよりも臆病で、誰よりも普通を望んでるユウジだもん。変な事には巻き込まれてないよ」

どう考えても、このタイミングで用事があるのはおかしい。昨日私
が寝た後に何かあったに違いない。
でも、信じてるから。大丈夫だって。

「おい、そろそろ出るから、さっさと用意しろよ」
廊下のほうから声が聞こえる。

「うん！今から出るよ！」
それに、大きな声で応える。

「じゃ、家に帰って少し休んだら、メールするから」
家の鍵を閉めて、真美に言う。

「うん。出来るだけ、早く済ませてね」
自分でも、いつ終わるか分からないけど、出来るだけ不安にさせたくないので、

「尽力します」
と応える。

「じゃ、また今夜」
真美は、小さく手を振る。

「ああ、また今夜」
それに俺はサムズアップで応える。
それで、真美は振り返り、自分の家に向かう。となりだから、すぐに着いてしまうけど。

真美は家の門の前で、もう一度俺に向かって手を振る。そして、そのまま家の中へと入っていく。

「さて、とりあえず、行ってみるか」
携帯を開く。

現在午後十二時四十五分。

「地図から視るに、そんなに遠くは無さそうだな」
大体、歩いて十五分ほどの距離だろう。

俺は、地図を頼りに、指定された場所に向かった。

第二章 おとうさん その3 (後書き)

今週はすこし遅れてしまいましたのが、もしかしたら来週も投稿できな^い恐れがあります。

とりあえず、逃走はしていませんので、呼んでくださっている方は、ご安心ください。

一応、次回は来週の土曜日を予定しています。

第二章 おとうさん その4

「なにこれ・・・ふざけてるの?」

現在、一時二分。

俺は馬鹿でかい門の真ん前に立っていた。

「ここ・・・だよなあ?」

携帯に送られてきていた地図情報を開く。それが示している場所は、紛れもなくこの場所で、

「間違いないんだよな?」

昨夜リムジンに乗せてもらっていたから、金持ちではあると予想はしていたけど、正直ここまでとは思っていなかった。

「てか、ここインターフォンどこよ?」

左右を見回してみるも、それらしきものは見当たらない。

「ま、こんな馬鹿でかい門の横にインターフォンがあっても違和感感じるだけだけどさ」

それにしても不便である。

「一体どうすれば良いのやら・・・」

はあ。とため息を一つついたらところに、

「あの〜、家に何か用ですか?」

と、声をかけられた。

「え?」

俺は声がしたほうを向く。

そこには、コトナによく似た女の子がいた。彼女によく似た金髪、瞳の色も彼女と同じ赤色。違う特徴と言えば、今目の前にいる女の子のほうがコトナより小さいという事と、髪型をストレートにしているという事ぐらいだろう。

「もしかして・・・不審者さん?」

女の子が俺に問う。

「えっ、あっ、いやっ、決して怪しい者では」

それに、手を全力で振って否定する。でも、このパターンって、どうやっても不審者扱いされるような気がする。

「そうですか。じゃあ、お父様のお客さんかな？」

信じちゃうのね。もう少し疑うという事を覚えても良いんじゃないかなだろうか？

さすがにそうはいえないので、

「ま、まあ、そんなとこかな？」

と応えておく。

俺もよく分らないけど・・・

「そつかあ、じゃあ、お通ししないかね」

そう言っつて、俺の隣に立つ。

「ごめんなさいね？家、すこし不便だから」

そう言っつて、門に人差し指をかざす。『指紋認証』と声が聞こえる。すると、馬鹿でかい門が開いてゆく。

「ぱ、ぱねえ・・・」

「じゃあ、案内するから、付いてきてください」

そう言っつて、俺に笑顔を向ける。

「あ、はい」

俺は、女の子の背中を追うように、門の内側に入っていった。

「お父様。お客様ですよ？」

俺は、薄暗い廊下に連れてこられた。ここに来るまで、結構階段を下りたから、多分地下だろう。

「なんか、凄いな」

廊下を真っ直ぐ歩きながら、思わず呟いてしまう。廊下の左右には、カプセルが幾つもあり、その一つ一つに、カリバーンと似たような武器が入っている。

「少し、長すぎますよね？せつかくのお客様なのに、不便でごめんなさい」

と、振り向いて俺に謝る。

「いや、そんな、お構いなく」

確かに、長すぎるような気もするけど、こんなかわいい女の子を見られるなら、それはそれで良いなんて思ってしまう。

「あ、そういえば、名前まだ名乗ってなかったですね
手をぽんと叩く。」

「ボクの名前は、葉月、天道 葉月です。多分、いろいろお世話になると思うから、これからよろしくお願いします」

ボクっ娘だと？このお父様とやははといったどんな教育をしているんだ？なんて羨ましいんだ。

「え、えくと、勝道 雄志、です。よろしく」

と、若干ドモリ気味に自己紹介する。なかなか丁寧な口調で喋れる、この子が羨ましい。

「ユウジくん、か。かつこいい名前ですね」

「あ、ありがとう」

「……………」

沈黙。

気まずい、気まずすぎる。

早くつかないかな。なんて思ってしまう。

「今日もいい天気だなあ……………なんちゃって」

と、上を見上げていつてみる。天井しかないから、天気など分かったものじゃないけど。

「……………」

少し間が空く。

やばい。もしかしてすべった？

「…………ふふつ。ユウジくんって面白い人だね」

彼女が笑ってくれて、ほっとする。多分、コトナにこんな事言ったら、確実にバカにされていただろう。

「あ、ごめんなさい。つい、いつも通りの……………」

多分さっきの言葉遣いのことだろう。

「えくと、別にいいですよ。敬語じゃないほうが話しやすいし」

「あ、えつと、じゃあ、ユウジくんも、普通に話してね？」
良かった。とにかく、この気まずい状況を打破した。

「そうだな、俺もこっちの方が話しやすい」

俺たちは、適当に話しながら、長い廊下を渡っていく。

現在、一時三十分。

「君にとってははじめまして。だね。勝道 雄志くん」

雄志と呼ばれた彼は、

「え、えくと、はじめまして？」

と、応える。

「まあ、適当に座ってくれ、ハツキも、ご苦労様」

「はい、お父様」

雄志は、納得がいかなかった。隣の葉月と呼ばれた少女を横目で確認する。

似てない、絶望的に似てない。

？お父様？を視る。縮毛気味な銀色の髪に、大きな丸めがね。そして、いかにも不健康そうな、痩せ細った身体。なにかと白衣が似合っている。

父の遺伝子弱すぎだろ。雄志はそう思った。

「ユウジくんも、遠慮なんかせずにかけなよ」

「あ、はい。ありがとうゴザイマス」

すこし、カタコト気味だが、一応礼を言う。

こんな人に、遠慮もクソもあるのだらうか、背もたれを、逆にして座っている、この人に、正直なところ、今にも「ハハハハハ」なんて笑いながらイスで回りそうだな。

なんて思っていた矢先。

「ハハハハハハハ」

と、くるくる回る。

彼は直感した、この人は確実にどこかがおかしい。天才と馬鹿は紙一重というが、目の前の男は確実に後者だ。紙一重なんて通り越し

て、余裕で馬鹿だ。

「ま、冗談はこの辺にして」

回転していた男は、ピタリと止まる。慣性を完全に無視したような止まり方だった。

「君は、ボクをおかしな人だと思うためにここに来たんじゃないんだろう?」

その言葉に、一瞬で寒くなったが、

「そ、そんなわけ、ないじゃないですか」

どうにか否定する。

心でも読んでいるのかと思った。このビジュアルならできてもおかしくは無さそうだが、いくらなんでも非現実的だ。

「そうそう、忘れてたけど、僕は天道 総司。天の道を往き、総てを司る者。君や、僕の娘が持っている、神器の創造者だ」

と、一昔前のヒーローよろしく、ソウシと名乗った男は右腕を上げながら、天を指差す。

「なにか、聞きたい事があるんだろう?」

「あ、はい」

「大方、君が置かれている現状か、どうして君が神器を持つようになったのか。だろう?」

本当に、この男は何者なのか。最早恐怖すら覚えてしまう。

「とりあえず、どうして俺がこんな事に巻き込まれてるのか、それを知りたいです」

「そうか、分かった。じゃあ、何から話そうか・・・そうだな、まずは、神器について、知ってもらおう事にしよう」

第二章 おとうさん その4（後書き）

まずは、投稿を一週間サボって申し訳ございません。特に理由らしい理由はなかったのですが、強いて言うなら今回の場面は書きづらかった。ということです。山場じゃないところは、何かと書きヅライです・・・

あと、今回新キャラ出てきましたし、どういうキャラ付けにするかよく決めておかないと、あとあと矛盾点とか出来ても嫌なんではい、正当化です。ごめんなさい。

というわけで、次回は少しはやめの投稿になるやもしれません。予定的には、火曜日か水曜日です。

今夜と明日で頑張って書きます。

第二章 おとうさん その5

「神器がどういうものなのか、君にはまずそれを知ってもらわないとね」

男は人差し指を立てる。

「まず、神器は今君たちが戦っている、ナイツを倒すための兵器だ」さらに、中指を立て、

「次に、神器は個人専用で、そしてお互いが同一の存在なんだ、だから君が持った神器は君にしか使えず、僕の娘の方が持っている神器はあの子にしか使えない」

そして、薬指をたて、

「最後に、神器には様々な機能がある。これはナイツと有利に戦うためのものだ。まあ、機能については後々説明するよ」

「ここまでで、何か質問はあるかな？」

男は手を下ろす。

「え〜と、同一の存在って、どういうことですか？」

説明を受けていた青年が、控えめに手を上げる。

「そのまんまの意味さ、君はあのカリバーンで、カリバーンは君なんだ」

「そのまんますぎるだろ！？そうじゃなくて、どうして同一の存在なのかってのを聞きたいんですよ！」

青年が怒鳴る。

「なんだ、それならそうと言ってくれればよかったのに」

男は地面を蹴り、イスごと後ろに移動する。イスの後ろには机があり、その上には大型のディスプレイが幾つも置いてあった。それをコントロールするためであるう、キーボードを打ち、ディスプレイに画像が出る。

「すこしだけ複雑だけど、まあすぐ終わるから」

イスを半回転させ、男は続ける。

「君は、HeLa細胞って知ってるかな？」

ディスプレイの画像から判断するに、今出ている画像が、HeLa細胞なのだろう。

「ヒーラサイボウ？」

青年はすこし難しい顔をする。

「人由来の最初の培養細胞のことだよ。簡単に言つと、死なない細胞の事かな」

青年の隣に座っていた、小さめの金髪少女が言う。

「まさにハヅキの言う通り、HeLa細胞は不死の細胞と言つていい」

それに、少女は少しだけ嬉しそうな顔をする。

「そのナンチャラ細胞と、ジンギに何の関係があるんですか？」
どこか納得がいかない、と言う顔で、青年が問う。

「神器はね、そのHeLa細胞を基にして造られた、神器細胞というものを持っている。その神器細胞も、僕が研究したものなんだ」

また、画像が変わる、研究員のような人が、試験簡にピペットを使って何かをたらしている。

「ジンギサイボウ・・・」

今回は進出単語が多いなあ。なんて、青年は思う。

「神器細胞は、生成する過程に、環境の影響を受けやすくってね、完全に同じものを作ることは不可能なんだ」

また画像が変わる。神器細胞のパターン例、と画像の上に書いてあるので、これが神器細胞なのだろう。

「それで、個人専用になるという事ですか？」

「そういうことだね」

「いまでの、理解できた？」

総てを司っているらしい、総司さんが聞いてくる。

「だ、だいたいわかった」

俺は両手を軽くはたく。大体わかったと言えばこつするのが俺の癖だ。と、いつても、俺が小さいときに見ていた特撮ヒーローがよくやっていたアクションが元なんだけど。

「はい」

俺の隣に座っている、葉月が手を上げる。

「個体差が出来るのはわかりましたけど、それは個人専用の説明じゃないと思います」

その問いに、俺は首をかしげる。

「え？そうなの？」

「ああ、そういうえば、それについての説明をしていなかったね」正直なところ、もう難しい話は聞きたくないが、俺から言い出したことなので、止める事なんて出来ない。

「神器細胞には、二つの特徴があつてね、一つは高い治癒能力。これはHela細胞を基にしてるから当然の事だけど、その能力は君たちの想像を絶するだろう」

すこしやばそうな特徴だ、これで本当の不死になるなんてオチだったら、俺は泣いて逃げ出すと思う。

「ま、切り傷や擦り傷程度ならものの数秒で回復しちゃうだろうね」数秒で、ですか」

少し怖くなってくる。と、同時に、本当なのかどうかを試したくもなってくる。

「うん、話を長くしたくないから、次に進むけど、二つ目の特徴が、神器細胞は、自信以外の物を、全て否定してしまうんだ」

「自信以外を・・・全て否定？」

「そう」

総司さんは、真剣な表情を浮かべる。

「って、どういう事ですか？」

その問いに、総司さんはズッコケそうになる。

「・・・リアクションだけは立派だね、ユウジ君は」

「いやあ、それほども」

頭をかきながら、微笑する。

「ユウジくん、それほめてないから」

葉月からツツコミが入る。

「え、よく言われてるのに」

「ふふつ、やっぱり面白いね、ユウジくん」

葉月が笑う。その笑顔がとても眩しい。

「本題に戻るよ」

総司さんが手を叩く。

「あ、はい。すみません」

「自信以外を全て否定するということは、自分以外のものは何でも破壊できるという事だ」

この言葉に、なにかが引つかかる。

「え」と、それじゃ

「自分たちも神器細胞によって破壊されちゃうんじゃないの？ってことを言いたいだよね」

葉月が隣から付け加える。

「そうそう、そんな感じのこと言いたかった」

「そうだね、全てを破壊してしまうのでは、神器を持つ事すらままならない。でも、自信以外を否定するなら、その逆は？」

「自信と同じものなら、肯定する？」

そのまんま逆の事を言ってみる。

「そう、正にそれさ。神器細胞は、同じものなら全てを肯定する」

「それで、俺とカリバーンは同一の存在ということですか」

「そうだね」

「うーん・・・話が難しすぎて、覚え切れない」

腕を組んで、いままで習った事を思い出そうとするも、頭の中を整理しきれない。

「無理に覚える必要はないさ。神器がどういうものかを知ってもらえればいいだけだから」

「そうですか・・・」
「なんだかほつとしたような、納得いかないような。」

「さあ、神器について理解してもらったようだし次に移ろうか」

「長かったね」

ホントに長かった。そろそろ眠たくなつてくるかも。

「何故君が、神器を持つ事になったのか。ついに、それを話すときが来たようだね」

別に僕は待ち望んでたわけじゃないけど。と、総司さんは付け加える。

「まず、神器を持つに当たって、一つだけ重要な事を話しておこう。また長くなるんじゃないだろうか。そんな気がしてならない。」

「神器をもつには、適合者、つまりは神器と同一の存在の者に、その神器の持つている神器細胞を移植しなければいけない」

「そうだったんですか」

「じゃあ、俺ってここに拉致されて無理やり移植させられたんじゃない・・・そう考えると、背筋が凍る。」

「拉致なんかはしてないから、安心するといい。話を続けるけど、移植にはパターンが二つある」

そして、総司さんは二本、指を立てる。そのうちの一本、人差し指を左手の親指と人差し指でつまんで、左右に揺らしながら言う。

「一つは間接的に、注射なんかを使って移植する場合だ。まあ、想像するだけでわかるだろう」

「あんまり好きじゃないけどね・・・」

葉月が苦笑する。

次に、つままれていたほうの指を下ろして、

「二つ目は直接的に、神器で心臓を貫く事によって移植する場合だ」と、淡々と説明する。

「コワ・・・」

考えただけでも身震いしてしまう。俺の場合、あんなにでかい剣が体に突き刺さつてることになるんだ、出来る事なら、注射での移植

であってほしい。

「心臓を貫くのは、それが血液のポンプになっっているからだね。やっぱり効率よく循環させるためには、源からじゃないとね」

たしかに納得できる。でも、絶対痛いよね。

「ユウジ君はその痛いほうだったんだけど」

「ああ・・・やっぱりですか？正直そんな感じでしたよ」

予想はできたけど、寒い。何かもうカリバーンがトラウマになりそう。

「ゆ、ユウジくん大丈夫？寒い？」

葉月が、俺の背中をさすってくれる。なにか違うような気がするけど、その気持ちに凄く嬉しかった。

「一応、画像あるけど、見たい？」

総司さんが言う。

「絶対見たくないです」

「まあそう言うと思ったよ」

すこしだけ、間が空く。総司さんが俺の顔色を伺っているから、気分がよくなったら続けるつもりだろう。

「あ、大丈夫です。続けてください。葉月も、ありがと」

いままでずっとさすってくれた葉月にも礼を言う。

「どういたしまして」

葉月はにっこり笑顔で応える。こんなのを見てしまったら、ハートが満たされるに決まっているだろう。

などと、ほんわか気分を味わっていると、

「じゃ、続けさせてもらうよ」と、総司さんが遮る。

「ユウジ君は神器が直接刺さったんだけど、どうやって刺さったんだろうね」

総司さんが、俺に向かって問う。

「そりゃ、やっぱり催眠とかで拉致したんじゃないですか？」

「拉致するんだったら間接的な方を選ぶよ。いくらなんでも危険す

ぎるからね」

それはそうだろう、もし神器と？同じ存在？でなかったら、直接的な方法はそのまま死ぬ事になる。

「でも、結局神器と同じ存在でないと死んじゃうんだけど」

「嘘やん・・・絶対嘘やん」

俺は心底神器という存在が怖くなった。使用言語が変わるぐらい衝撃を受けた。

「あえて突っ込まないでおくけど。当然だろう？神器細胞は自信以外を破壊してしまうのだから」

「だったら、結局どっちも危険じゃないですか!？」

「神器細胞を移植する際には、個人に合わせて細胞を造るからね。間接的な方は比較的安全と言える」

「そうなんですか」

幾つもパターンを作り出せるんだから、そう考えるのは当然なのかもしれない。

「でも、個人に合わせて造った細胞は、限りなく同一の存在に近いというだけだ。もしかしたら、それ以上に神器に適合している人間がいるかもしれない」

「え？なんでですか？個人に完全に合わせて造ることは無理って事ですか？」

「そうだね。神器細胞は造る過程で、環境に左右されやすいと言っ
たらう？そのおかげで、少なからず誤差が出てしまうんだよ」

最近の研究も進んで、限りなく近く個人に合わせてられるようになったんだけど、昔は凄く苦労したんだよ。なんて、笑いながら付け加える。

「てか、そのことと、俺が神器を持つようになったのって、関係ないんじゃない？」

「この話を踏まえたうえで話しておきたいからね。これからが本題だ。さて、仮に、神器と同一の存在の人間が現れた場合、神器はどうなると思う？」

一気に話が変わった気がする。

「うーん、同じ存在か・・・引かれ合ったりするんじゃないですか？運命の赤い糸的な感じで」

「そう、正にそれだ。僕たちは、神器と完全に同一の存在の人を過剰適合者と呼んでいる。ユウジ君、君はカリバーンの過剰適合者なんだ」

テキストでも言ってみるものだ。まさか正解なんて。

「ということは、俺はカリバーンと引かれ合って、今に至るってワケですか？」

「そういうことだね。カリバーンと君は引かれ合って神器細胞を移植したんだ」

話の内容は、難しかったけど、何で俺が神器を持つようになったかは分かった。

でも、それだけじゃ足りない。まだ疑問は幾つかある。

「まだ質問するかい？」

また心を読んだかのように、俺に問う。

「いや、いいです。今聞いても頭に入らないと思うんで」

いろいろ教わった事が多すぎて、今でも頭の整理ができない。

「そうか、まあ続きはまた後日にしよう。君にも、少しだけしてもらおう事があるからね」

「え・・・まだあるんですか？」

俺からの用事は終わったので、家に帰れるものだと思っていたが、どうやらまだ家には帰してもらえないらしい。出来ればもう帰りたいんだけど。

「とりあえず、場所を移そう。葉月も、そうだね。用事がてらに調整しようか」

第二章 おとじさん その5 (後書き)

次回更新は、土曜日午後七時頃になると思います

第二章 おとうさん その6

現在、午後六時四十六分。

「しんどい・・・しんどいなんてレベルじゃないくらいしんどい」
しんどいなどとぼやいている彼、勝道 雄志は、トボトボなどという擬音語が出てきてもおかしくないような足取りで、自宅の玄関前に立つ。

「とりあえず、いったん寝よう。真美には九時くらいに着くようにメールして、それから即行寝よう。うん、それが一番。まさに一番の選択」

自分でも何を言っているのかは分からないが、とりあえずやる事は決まっているので、ドアを開け、靴を脱いで家にかかる。

「ただいま」

誰も向かい入れてくれない家。それが彼の家。理由は単純、現在は彼しか住んでいないから。

いつものことだから。と、諦めている彼ではあるが、それでもやはり虚無感のようなものは拭い去れない。

そんな感情に、嫌悪感を抱きながらも、リビングへと進む。

「どっこいしょお・・・」

腰をソファに一気に落とす。それほど高価なものではないので、少し硬い感触が尻に伝わるが、むしろそれが心地よかった。

「メールしないと」

ポケットに入れっぱなしだったのを忘れていたので、重い腰を少し浮かせて、ポケットに無理やり手を突っ込み、携帯を握る。疲れで力が入らないので、ポケットの圧迫感が鬱陶しい。

それに苛立ちを覚えながら、携帯を取り出す。

「ま、九時前に来るだろうから、そんな時に起こしてもらえらる」
それを見越して、メールを送る。送信完了の四文字を確認し、携帯を閉じる。

「はぁ・・・しんど」

彼が疲れを感じているのは、四時間半にも及ぶ？調整？の所為だった。神器の機能を扱う調整、神器を持ったままでの立ち回りの調整、そして、実戦形式の調整。

「思い出すだけでもしんどい。これは夢に出てきてもおかしくないレベルだな」

そう言いつつ、瞼を閉じる。リビングの電気を点けっ放しにしていたから、目を瞑っても明るさは感じられたが、今の彼にはそれすら通用せず、深い眠りに落ちた。

午後九時。

「おーい、ユウジ。おきろ」
聞き慣れた声が俺を呼ぶ。

「早く起きないとペちペちしちゃうよ」
と、頬をぺちぺちと音を立てながら叩かれる。

もう叩いてますやん！関西風のツッコミを試みるが、声が届いていないのか、頬は依然叩かれたまま。

「かくなる上は・・・」
何か嫌な予感がする。どうにか回避しないと、でも、体が言う事を聞かない。

「えい！」
わき腹を突かれる。やめて！叫ぶがまだ届かない。

「そりゃ！」
もう一発。だからやめてって言って
「とう！」

さらにもう一発。

「うおおおおおおお！やめろって言ってんだろっがぁ！」
上半身を勢いで起こす。どうにか体を制御下におくことが出来た。

「やっと起きた・・・にしても叫ぶのはナシだと思っよ」
ビックリしたのか、腕で顔を守るような体勢をとっていた。

「あ、ああ、ごめん」

「いいよ。でも、もう九時だけど、なににする？」

「なににする？つてお前・・・決めてないのかよ？」

「当たり前でしょ？」

何が当たり前なのか、子一時間ぐらい問いたかったが、

「ぬう・・・そうだな、とりあえず、外にでも出るか？」

女の子と一緒にする事と言うのも、あまり思い浮かばないので、散歩にでも行くことにした。

「それなら、展望台行こうよ！久しぶりに、星が見たいな」

真美が言っているのは、町外れにある展望台の事だろう。昔はよく真美と、真美の両親と一緒に星を見に行っていた。

町外れと言っても、自転車でいける距離なので、さほど遠いわげじゃない。

「そうか、じゃ、行くか」

ソファから腰を持ち上げる。すこしだけ体が重いけど、今の俺にとつてはどうってこと無いだろう。

「やっぱり、ここからじゃ星は見えないね」

自転車の荷台に腰掛けている、真美が呟く。

「そりゃまあ、ここら辺はまだ光が多いしな。星が放ってる光よりも、街灯の光のほうの方が明るいから、まだ見えないだろうよ」

俺は自転車を漕ぎながら、真美に言う。

展望台は、町外れの小さな丘の頂上辺りに位置するので、街の街灯よりかは高い位置にある。十年ほど前までは、今俺たちがいる辺りからも、少し星が見えていたが、今では光が多くなって、すっかり見えなくなってしまった。

「丘の麓でも、家が増えちゃったもんね」

「そうだな・・・そろそろ坂道だから、しっかりつかまれよ」

真美が俺の腹にしっかりと抱きつくのを確認してから、漕ぐ足に力を入れる。

なかなか重い。俺も真美も、昔から随分成長してしまったから、体重はかなり増えてしまっているんだろう。

「ぬうう・・・!!」

足に思い切り力を込める。そうでもしないと、進まない。

小さい丘とは言っても、自転車で登りきるのはさすがに無理があったか。

「あゝ、ごめん。やっぱ一気に登るの無理っばい」

その瞬間、足が動かなくなった。バランスが崩れて、倒れそうになる。

「もう、だらしがないなあ・・・」

真美が脚を着いて、自転車を支える。

「面目ない」

俺も脚を着いて、真美と一緒に自転車から降りる。

「ま、急ぐよりは、のんびりするほうが私とユウジには似合っているかな？」

「なんだよ、まるで爺さん婆さんじゃないか」

そう言いつつも、その通りに思えて仕方が無い。急いだりするのは、どうも性に合わない。ゆっくり、のんびり、落ち着いて進むほうが俺は好きだ。

そのまま、俺たちのペースで、丘を登ってゆく。

午後九時四十八分。

「わあ！見えるもんだね」

俺は空を見上げる。

そこにあっただのは、無数の星。

「ホント、よく見える」

もう少し明かりが少なければ、もっと輝かしい光景が広がっただろうが、今の光景でも、十分に綺麗だった。

「随分街灯も増えたから、ちょっとぴり不安だったけど、昔見てたのと、あんまり変わってないね」

「そりゃ、この街の街灯は下以外に光を照らさないようにしてるからな。そのおかげだろう」

夜空を汚さないように、必要なところだけを照らす。これだけでも効果は十二分に発揮しているようだ。

「春の大三角形、あるかなあ？」

真美は手すりの上に腕を乗せて、夜空をじっと見つめる。

「えーと、ホラ、あのオレンジ色の奴がアークトゥルスって奴で、そこから右にある白色に光ってるのがスピカ、んでその頂点を作るように控えめに光ってるのがデネボラだよ」

真美の隣に立って、星を順に指差す。

「あ、あれか。それにしても、ユウジは物知りだね」

「ま、まあな」

とても中二の頃に天体に詳しい俺カツコイイみたいな理由で詳しくなったなんて言えない。

「綺麗だなあ・・・」

空を見上げながら、真美が呟いた。どこか寂しげで、なにか、とても愛おしいものを見ているかのような顔をする。

真美は手を伸ばす。おそらく、星に向かって手を伸ばしているんだろう。それは、《届かないものに手を伸ばしている》よりは、《どこか遠くに言ってしまうような人を止めようとしている》様に見える。

どうしてそう思ったのかは分からない。でも、なんとなく、そんな気がした。

「星、綺麗だったね」

現在十時四十分。なんだかんだで三十分近く星を見ていた俺たちは、自転車で二人乗りで、岐路に立っている。

「そうだな」

尤もらしい言葉が見つからないので、そっけない返事になってしま

「また、いつか見に行こうね。絶対」

「そうだな。次に行くときは、ちゃんと上れるように努力します」
真美にだらしなしいと言われたことが、何気に悔しかったので、意思を強く固める。

「うん、期待しとくよ」

そろそろ家に着く。そしたら、風呂に入って寝よう。真美もすぐに寝ちやうだるうから、ちようどいい。

「・・・ねえ」

真美が、少しだけ強く抱きつく。

「ん？なんだよ」

「無理、しちゃダメだよ。助けてほしい時は、言ってね。絶対、力になってみせるから・・・」

真美には、かなわないな。何もかも、と言っわけじゃ無いだろうけど、やっぱり筒抜けなんだ。それでも、氣遣ってくれている真美が、とても暖かかった。

「ああ、遠慮なく。いつかそうさせてもらつよ」

そこで、会話が続かなくなる。
たぶん、真美の顔は赤くなってると思う。そう思うと、なんだか心が軽くなったような気がする。

「ただいま、と」

家に帰るなり、即行でリビングに向かう。

冷蔵庫の中のコーラを取り出し、グラスに注ぐ。

そして、それを一気に喉へ送り込む。

「っぷっはあああ！この一杯い」

「ユウジ、おじさんみたいだよ」

リビングに入ってくるなり、真美が言う。

「炭酸飲むとみんなこうなるもんだろ」

「そうかなあ？」

そう言いつつ、真美もコーラを注ぎ、飲む。

「うう・・・一気に飲んだら痛くない？」

少しだけ目が潤んでいる。

「ま、慣れれば痛くないって」

そうかなあ？と言いつつ、コーラを少しづつ飲み干していく。

「ま、先に風呂入ってこいよ。出る前に一応沸かしといたから」

今日は疲れたから、早めに寝たいところだが、先に風呂に入るのは、どこか忍びなかったので、真美に風呂を譲る。

「うん、わかった。じゃ、先にいただいちゃうね」

そう言い残し、風呂に向かう。

普通。これが、俺の日常。そこそこありふれた、いつも通り。

「たぶん、今日も行かなきゃならないんだろうなあ」

俺は伸びをする。疲れをある程度リセットするため、気持ちいを、改めるため。

第二章 おとうさん その6（後書き）

なかなか話が進んでない感がありましたが、次辺りで動いていくと思います。

次回更新は、来週土曜日までです。おそらく早めの更新になるとは思いますが、まだ分からないもので・・・
最長でも来週の土曜日という事を覚えていてくれればいいです

第二章 おとうさん その7

午前二時十分。

「ううん・・・」

彼、雄志は目を覚ます。

起きたくて起きたわけではない。なぜか目が覚めてしまったのだ。

「これが、夜型人間って奴か」

勿論、間違っている事は分かりきっている。

認めたくない。と言うわけでもない。

自分でもよく分からない感情が、胸の奥から湧き上がってきているのだ。

「先に用意しとくか」

彼は伸びをする。体を動かすための準備をする。

「そついや、何か要るものってあったっけ？」

用意をするといっても、何かがいるわけではないので、微妙に困ってしまう。

「ぬう・・・ま、いつか」

とは言ったものの、何をすればいいのか分からない。

する事が無いと、時間の流れと言うものは、嫌に長く感じてしまふ。

「・・・」

そついえば、今日の調整で教わった事は何だったっけ。不意に、頭によぎる。

戦いを有利にするための、神器の機能とやらを教わったので、自分の戦いは出来るだけ有利に進めたい。

「たしか・・・基本的なのは、三つだったな」

今日、調整で体験した事を思い出す。

そつしていると、どこかから物音がした。

「!?!」

一気に心臓が高鳴る。

「ま、真美だよな？」

上で寝ている彼女を思い浮かべる。おそらく寝返りでも打ったのだろう。

「ビックリしたぁ・・・」

心のそこから安堵する。特に何かをしていたわけではないが、急に音が鳴ると驚いてしまうものだ。

しかし、どうやら物音は寝返りではないようだった。

「・・・・・・・・」

足音。誰かの足音。それも、二階ではなく、一階。

一步、一步。音は段々と大きくなっていく気がした。

彼は、ゆっくりと後ろを振り向く。

誰もいなかったが、彼の目には、ドアが映りこんだ。

決して、とまでは言えないが、彼が個人的に開けたくない部屋。

絶望と希望が同時に詰まっている部屋。

「まさか・・・な」

泥棒なのか。はたまた違う何かなのか。どちらにせよ、あの部屋に侵入したなら、許すわけにはいかない。

腰を上げる。そして、大きく深呼吸。

数秒目を瞑り、リラックス。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よし」

覚悟を決め、ドアを目指す。リビングは、それほど広くないので、数秒もしないうちに、ドアの前に立つ。

大丈夫。そう思いながら、ドアノブに手をかける。

「何も無いのが一番なんだけど、何か居るんなら泥棒さんがいいかな」

小声で呟きながら、ドアを開ける。

そこに広がる光景は、彼の想像を凌駕していた。

なぜなら、ここに居ないはずなのに、ここに居るべきものが、在ったから。

第二章 おとうさん その7（後書き）

第二章は、これで終わりです。

次回は、最短で日曜日、最長で来週の土曜日です。

久しぶりに、来週からバトルです。

一応、今回から本格的なバトルになると思いますが、おそらくクオリティは低いと思います。いかんせん初めてのものです・・・とりあえず頑張りますので、生暖かい目で見てください。

第三章 たいせつなもの その1

無限世界。

「動き出したみたいだね」

少年の声が響く。

だが、それに応える声は無かった。

「うーん・・・みんな夢中なのかな？」

「どうせ、自分たちの立場が弱まるのを恐れてるんだろっね」
「はあ・・・と声はため息をつく。」

「そうだね。じゃ、僕もアレを観測させてもらおうとするよ」
そして、その世界から、全てが消えた。

そこに居たのは、泥棒でも、それ以外の何かでもなく。

「父さん？」

俺の父親だった。

「ん？ああ、ユウジか」

父さんは、少しだけ笑みを浮かべる。

それは、俺の幼い頃の記憶のまま、何一つ変わってない。

だから、あの事実の事なんて、忘れてしまっていた。決して拭い去れないはずだったのに、いとも簡単に崩れ去ってしまった。

とにかく、今は自分の肉親に出会えた事が、とても、嬉しかった。

「いままで、どこ行ってたのさ・・・ずっと、一人だったのにさ」

目から涙がこぼれる。十年間の想いが、あふれ出ているんだろう。

「まあ、準備してたんだよ」

父さんは、一歩近寄る。

「準備？何の？」

俺は、反射的に下がってしまった。

「決まってるじゃないか」

また一歩、近づく。

それに、俺はまた一步下がる。

「ユウジ、お前を」

父さんは、笑みを浮かべる。さっきの優しい笑みじゃなく、人を恐怖に陥れる、怪しい笑みを。

「壊しに来た」

父さんは、ゆっくりと、手を前に持つてくる。

「なんだよ、壊しに来たって・・・」

俺の涙は、もう別のものへ変わってしまった。喜びのものじゃなく、恐怖と憎しみのものに。

「そのまんまの意味だよ。行け」

ガガ・・・ガガガ・・・！ガガガ！！ガガガガガガガガガガガガ！！！！

頭の中に、何かが響く。頭がガンガンする。

「う、う・・・」

頭を強く抑え、痛みが治まるのを待つ。

気分が悪い。吐きそうだ。

「と、う・・・さん」

父の周りに、黒い霧が密集する。これと似たような感覚を、俺は味わった事がある。

ナイツが出てくる時の感覚だ。あのときはもっと緩かったが、あのノイズを大きくしていけば、今のような状態になるかもしれない。逃げないと。こんな状態じゃ、戦えない。たぶん、ナイツが出てくるんだろう。それなら、もうすこし広い場所に移動しないと戦い辛い。

「くそっ！！」

ドアを蹴破る。

「とにかく、外に出ないと！！」

まずリビングに出る。すると、テーブルの上に置いていた、携帯が鳴っていた。

「なんだよ！？こんな時につ！！」

携帯を開き、応答する前に、イメージリアリティを起動する。壁をイメージして、それをドアがあった辺りに、具現化させる。

とりあえず、これでしばらくは時間が稼げるはず。

そして、さっき俺に電話を掛けてきた奴に、掛け直す。

「なんだよ!？」

電話の主は、コトナだった。

「なに怒鳴ってるのよ!いい!?!いますぐその家から出なさい!詳しいことは後で話すから!」

彼女はそれだけ言って、一方的に電話を切る。

「言われなくてもそうするつもりだって!だいたいお前も怒鳴ってんじゃない」

と、突っ込みつつ俺は急いで二階に上がる。上には真美がいるんだ。どうにか逃がしてやらないと。

「マミ!」

俺の部屋のドアを開け、叫ぶ。

「マミ!起きろ!」

「ん?どうしたの?」

暢気にあくびなんかして、眠むそうな目で俺を見る。

「説明は後でするから!とにかく逃げるぞ!」

真美をベッドから引きずり出して、部屋から出ようとする。

しかし、部屋から出るための出口は、すでに埋まっていた。

目の前が、闇に染まっている。それをよく見ると、バスケットボール大の黒い球体が進路をふさいでいるようだ。

「これって・・・」

嫌な予感がする。これは直感的みたいな曖昧な感覚じゃない。

みし、みし・・・みしみし・・・

家が悲鳴を上げている。

「え?なに?地震?」

真美もさすがに、異常な状況に置かれている事を認識しているらしい。

だが、逃げようが無い。安全な退路は断たれてしまった。

「仕方ない……」

俺は、神器を呼ぶ。こうなってしまうてはやむを得ない。強行突破あるのみ。

「わわわ……ユウジ、それ何？」

真美は、神器におびえるような素振りを見せる。

「ごめん、あとでちゃんと話すから！」

おそらく、廊下の道をこじ開けてるんじゃない、時間が足りない。だったら、

「少し危ないから、絶対離れるなよ」

イマジンリアリティを起動させる。

イメージするのは、巨大な鉄球。神器呼んでいる間は、イマジンリアリティの規制が全て解除されているらしい。壁は防衛手段として利用が制限されないが、鉄球となればそうはいかない。

その鉄球を、窓の方へ具現化させる。俺の部屋の窓は、外の道路側にあるので、そこから外に出られる。

バキバキ！！派手な音を立てながら、家が壊れていく。

俺はカリバーンを床に突き刺し、

「マミ、ちよつとガマンな」

俺は真美を抱き上げる。所謂お姫様だつこと言うものが、一番安定するので、それをチョイスする。

「え？え？」

真美は混乱しているようだが、それを気にしていられる余裕は、無い！

「跳ぶぞ！」

鉄球で開けた穴に向かって、カリバーンを蹴飛ばしてから、少し助走を付け、ジャンプ。

それほど高いわけじゃないけど、生身で着地するには、すこし危ないかもしれない。

イマジンリアリティ、起動。

イメージするのはクッション。よく救助隊なんかが、飛び降り自殺の人を助けるときに使う、あれだ。

重心をコントロールして、背中から着地する。

「ぐえ……」

真美を抱えたままだったので、その体重が、俺にのしかかる。

「あら？あなた、女の子なんか家に連れ込んで……意外と隅に置けないわね」

クッションの横に、コトナが立っていた。

「そりやどうも」

真美から先にクッションから下ろし、イメージリアリティを解除するため、携帯を取り出したが……

「うわ……壊れちゃってるよ」

俺の携帯は見るも無残な姿になってしまっていた。

イメージリアリティが強制解除される。それに、俺は尻餅をついてしまう。

「いつつ……」

「ユウジ、大丈夫？」

真美は、俺に手を差し伸べる。

「おお、ありがと」

真美の手を借り、立ち上がる。

まさに、その瞬間だった。

大量の砂埃が舞う。木材が碎ける、鈍い音。ガラスが割れる、鋭い音。俺の家が、俺の積み上げてきたものが、俺の思い出が、すべて、全て、総て、音と砂埃を立てながら、崩れ去っていく。

「ええ……」

ショックが大きすぎて、これだけしか言えない。

「ま、あれだけ派手にやればねえ……」

「俺に非はないだろ」

原因の一部に、先程具現化させた鉄球も入ると思うが、元をたどれ

ば父さんの仕業だ。

「そういえば、父さん、じゃなくて、ナイツは!？」

「心配しなくても、もうすぐお出ましよ」

砂煙から、無数の黒い球体が飛んできた。

「うお!？」

カリバーンを盾に、それらを弾く。

黒い球体は、俺たちの周囲をあつという間に覆い尽くす。

「ゆ、ユウジ。これ、なんなの?」

マミが俺に体を寄せる。

「え、えくと、まあ、アレだ。お前がいつてたこと、本当になつちやつたみたいだ」

少し前に、真美が言っていたことを思い出す。

「いちやいちゃしてないで、この状況をどうにかしないと!」

コトナが怒鳴る。

「してねえよ!でも、どうすんだよ?」

「あなたの神器のキャスト・オフの性能は何のためにあるのかしらね?」

若干笑顔が怖い。どうやら、カリバーンのキャスト・オフで道を切り開け、という指示らしい。

コトナの態度に、もう少し優しくしてくれないものかと思うが、そんなことを口にしてしまったら、さらに怒られそうな気がするので、ここは素直に指示にしたがっておこう。

「キャスト・オフ!」

カリバーンの、翠色の眼を押す。

『cast・off!』

カリバーンが応える。俺は、水平にカリバーンを振るう。

「走りなさい!」

飛散するパーツを、懸命に追いかける。

「マミ!大丈夫か!？」

手を強く握る。魂ごと離してしまう、そんな気がしたわけではない

が、手を離すと何かいやな事が起こりそうな気がしたので、強く、強く握る。

「う、うん！」

真美は応える。状況を把握できては居ないようだが、この状況が異常だという事は分かっているようなので、素直について来る。

コトナはすでに走り抜けてしまったようだが、俺たちは少し遅れてしまっているので、球体が襲い掛かってくる。

「クソ！」

カリバーンを振るうが、的が小さい上に、神器自体が大きいので、どうしても大振りになってしまうので、なかなか当て辛い。

どうにか切り抜けるが、球体はまだ俺たちを襲ってくる。

全力で走りたいけど、それじゃあ真美が付いて来れない、バランスを崩してこけてしまうのが関の山だ。

「マミ！二度目だけど、許せ！」

カリバーンを地面に突き刺し、またお姫様だっこをする。これで、安心して走る事が出来る。カリバーンを置いていってしまう事になるが、また呼ばばいいだろう。

「しっかりとつかまっとけよ！」

脚に全ての力をこめ、走る。何が何でも走る。

「コトナ！」

少し前方を走っていたコトナに追いつく。

「ここじゃ狭すぎてやりにくいわ！広い場所に出ましよう！」

この道を二百メートルほど走れば、交差点に出る。駅が近いから、人がいるかもしれないが、この深夜帯なら、出歩く人は殆どいないだろう。

俺たちは、交差点を目指し、全力疾走した。

第三章 たいせつなもの その1（後書き）

次回更新は、かなり遅れる恐れがあります。

最悪一週間以上かかるかもしれません。

出来る限り早く投稿したいと思いますが、おそらく間に合わないと思いますので、

予定は再来週の土曜日にしておきます。

第三章 たいせつなもの その2

「ふむ、まさかあんな事をするとは・・・」
崩れた瓦礫の中に、男が一人、立っている。

「面白い。さすがは？こいつの息子？と言つべきか？」

男は、瓦礫の中に、写真立てを見つけた。

そこには、幸せそうな家族の写真が移っている。幼い頃の、先程駆け抜けて行った青年と、その母親であろう女性と、今ここに立っている男。

「幸せだったんだな。マサシよ」

正志、それは写真の中の小さな男の子の父親の名前。今、写真の中で、幸せそうに笑っている男の名前。

男は、その写真を、写真立てから取り出し、ポケットに入れる。

「じゃ、俺もちよっくら行ってやるかね」

男は自らの神器を呼ぶ。

「ケラウノス・・・」

それは、彼の長年の相棒でもあり、愛する人を壊した、神器。雷光の名を冠する、短剣。

眼の色は蒼。刃渡りは約60センチ、鐔に当たる部位には、当然のごとく眼が付けられている。

そんな相棒を、手ごたえを確かめるように振り、納得したような顔をする。

そして男は、姿を消した。

「くっそおおお！！」

俺は、深夜の街を駆け抜ける。後ろから迫っている、黒い大群から逃がっている。

二、三個の塊が、俺に向かって飛んでくるのを、左右に避け、塊が地面にぶつかつた痕を見ながら、肝を冷やす。

でも、逃げるのもそろそろ終わる、目の前には交差点が見えてきた。広い場所なら、十分に戦える。

「そろそろね、もう少しだから頑張りなさい！」

「とはいっても、着いてからもっと頑張らなきゃいけないじゃん！？」

俺とコトナの間、塊が飛んでくる。それを避けつつ、会話を進める。

「細かいところにいちいち突っ込む男は嫌われるわよ！」
また塊が迫る。

「うっせえな！人間繊細な奴が一番いいんだよ！」

それを避けつつ、言い返す。

などと、言い合っているうちに交差点に着いてしまう。

「さて、ここから反撃開始ってところかしら？」

後ろを振り返り、コトナは眼を押す。

「キャスト・オフ！」

『cast・off!』

右手で、鞘だった刀身を握り、それを振るう。

その刀身は、いくつかのパーツに裂け、塊の群れに飛んでいく。

「一瞬で終わらせてあげる！」

鞭のような刀は、踊るように黒い塊たちを切り裂いてゆく。

「じゃ、今のうちにどっか隠れとけ！」

俺は、真美をおろし、建物を指差す。そこはこの前真美と一緒に行ったデパート、ココアだ。

「う、うん。気をつけてね」

それだけ言って、真美は走る。

こんな時になっても、まだ俺のことを心配するんだな。ありがたいけど、もう少し自分の身を案じてほしい。

気にしていても仕方が無い。とりあえず、コトナに加勢しないと。

「もっかい来い！カリバーン！」

手元にかりバーンを呼ぶ。地面に突き刺したときはキャスト・オフ

した状態だったが、元の状態に戻っていた。

「しかし、多いな・・・」

若干躊躇ってしまう。さすがに数が多すぎる。どこかに親玉でも居ないものか。

「やっぱこういう状況は、親玉が居てこそ成立するもんだし・・・」
辺りを見回してみるが、それらしき影は見当たらない。

「なにやってんの！そっち行ったわよ！！」

コトナの怒鳴り声とともに、黒い群れが俺に迫る。

「くっそ！マジかよ！？」

俺はカリバーンの眼を押す。

「キャスト・オフ！」

『cast・off!』

斜めに切り上げるように振るう。パーツが四散し、塊を貫いていく。

「そうだ、試してみるか」

塊の一つ一つは小さいので、大振りの武器を持っている俺では、当てる事が難しい。

だったら、相手の動きを止めればいい。

「クロック・アップ！」

再び、眼を押す。

『clock・up!』

時が止まる。というより、俺の動きと、感覚が活性化する。

体が熱い。総司さんの説明によれば、神器細胞が活性化し、自身のスピードを格段に上昇させているらしい。

「これなら、いける！」

無様に止まっている塊を切り裂いく。一つ、二つ、三つ。

一つ一つ、確実に裂いていく。

「なんか楽しいな」

今まで俺たちを襲っていた奴らを、無抵抗のもと倒していくのは、気分が良かった。

数もかなり減ってきた、あと一息で全て片付く。といったところ

で、

『crock・over』

クロックアップの限界時間が来た。

「まじで・・・うつ!?!」

体がかなり重い、さらに、血が激動しているような気がする。何と言えはわからないが、激しい痛みが、感覚が俺を襲う。

溜まらず膝をついてしまう。

そのチャンスを逃さんとばかりに、球体たちは俺目掛けて飛んでくる。

「長くやり過ぎなのよ!もつと考えて使いなさいよ!」

コトナが俺をフォローする。

「ご、ごめんなさい」

「謝ってる暇があるなら、さっさと立ちなさい」

立ちたいところだが、体に力が入らない。カリバーンを杖代わりに立ち上がってみるも、脚がぶるぶると悲鳴を上げる。

「だらしないわね・・・ちょっとガマンしなさいよ?」

そう言つて、コトナは左手で持っているスサノヲを振るう。

俺の両太もも目掛けて・・・!?

「ちよつ、つと何やつてんすか!?!コトナさん!いてえ!超いてえ!ぱつくりいつてもうてますやん!?!」

俺の太ももは、驚くべき事に、数センチは切り裂かれた!

血がまるで噴水のように噴出し、地面と俺のズボンを紅く染め上げる。

しかし、もつと驚くべき事は、

「数十秒ぐらい、ガマンしなさい」

斬った張本人は、まったく反省の色が無いという事だ。確かに確信犯だが、これはいかななものかと・・・

「数十秒つてレベルじゃねーぞおい!アホなの?アホなのですか!?うわああああああん!?!」

血の噴出孔が凄く熱い!血は収まるきざしを見せず、勢いよく飛び

出る。

「はぁ・・・大丈夫よ、もうすぐ収まるから」

コトナは、黒い塊を弾きながら言う。

その言葉の通り、血の勢いは収まってきた。心なしか、痛みも引いている気がする。

そして、数十秒ではなく、十数秒で傷口は塞がってしまった。

「数十秒ってレベルじゃねーぞおい・・・」

「ほら、さっさと立つ」

コトナが飛んでくる塊を、全て切り払う。

今はふざけている時間じゃない。とてつもなくピンチなんだ。

とにかく立ち上がらないと！

「よっと！ ってありゃ？ すんごい楽なんだけど」

「疲労なんかは、傷をふさぐと同時に回復するから、覚えときなさい」

そうは言っても、いちいち疲れとるために痛い思いするのは、気が引ける。

「嫌なら、クロック・アップは使いすぎない事ね」

また心を読まれて様な気がするが、この際気にしない。

「わかった。でも、それはいいけど、数が減った気がしないんだけど？」

斬っても、潰しても、いくら倒しても、塊は突進してくる。何回も、何回も。

「やっぱりこういうのって、親玉がいるものよね？」

「それ、俺が少し前に探してた」

「だからボーっとして油断しちゃった？」

コトナが毒突く。

「うう・・・すみません」

言い返すにも、それは出来ないの、素直に謝る。この子に逆らうと何をされるか分かったもんじゃない。

「それはそうとして、俺、すげえ重大な事に気が付いちゃったんだ

よね」

背中を近づけながら、俺は話題を逸らす。親玉を探すのも大事な事だが、それよりも、かなり深刻な問題を今、気が付いた。

「何よ？言ってみなさいよ」

それを察してくれたのか、コトナも話に乗ってくる。

「俺、寝巻きのままだわ」

沈黙。風の音さえ聞こえてくるほどの、沈黙。

その静寂を破るように、黒い塊は迫る。

「あなたって、相当お馬鹿さんよね」

迫る塊を切り伏せて、コトナが言う。

「男は馬鹿なくらいがちょうどいいんだよ！」

俺は、迫る塊をカリバーンをバット代わりに打ち返す。

携帯も壊れてしまっているので、イマジンリアリティを起動させる事すらままならない。

「仕方ないわね。少しの間、フォローしてね」

そう言っつて、携帯を取り出す。目を瞑っているの、今イメージしているところなのだろう。

勿論、隙が出来てしまっているコトナに、塊は一斉に迫ってくる。

「やばっ！キャスト・オフ！」

跳び上がりながら、カリバーンの眼を押す。

コトナの頭の上を、かすめるように、カリバーンを振るう。

『cast・off!』

パーツが四散し、黒い塊たちを消してゆく。

そして着地。それと同時に、寝巻きだった服が、姿を変える。

「そのまま伏せなさい！」

コトナが左手のスサノヲを振りかぶる。俺はどこぞのアクション映画のようにかわそうとするが、甘くいくはずも無く、背中から倒れる。そのまま、スサノヲは俺の後ろに迫っていた塊を斬る。

「あつぶね！」

髪の毛が、少量、宙を舞っている。すこし遅かったらどうなってい

た事か。

「これでおあいこでしょ？」

助けてくれたのはありがたいのだが、もう少し安全な方法はなかったのだろうか？

「ま、とりあえずアリガトウゴザイマス」

カタコト気味だが、一応感謝はしているので、立ち上がりながら礼を言う。

「てかこれなんだよ？制服？」

俺が着ているのは、白いブレザー。下には赤いカッターシャツ、そして、ブラウンベースの、黒いチェック柄のズボン。

コトナも、同じようなデザインの服を着ている。あっちは、ズボンじゃなく、膝丈のスカートだが。

「うちの高校よ。宝神学園の物なの」

「宝神学園って、あのボンボンが行くところか」

宝神学園は、ゼノリアルの中でも、特に大きな私立高校で、高学歴、高学費、なにかにつけて《高》の字が付く学校である。

「何か御不満でも？」

コトナが問う。

「特に御座いませんよ」

俺は、応える。

「ならいいわ。さて、あなたとモタモタしてたら、また囲まれちゃったわね」

それに、俺は周りを見渡す。右を見ても、左を見ても、黒、黒、黒、

上を見上げてみるも、暗黒だった。俺たちは、暗闇に囚われてしまっていた。

俺たちは、いや、俺はまったく予感していなかった。単に視界が悪かったわけではない。俺が最も恐怖すべき事が、これから起こる事を。俺が最も恐怖する存在が、近づいている事さえも。

第三章 たいせつなもの その2（後書き）

今回は遅くなるなんて書いておいて、予定日より早く投稿してしまいました。とうふです。

一応毎日来てくださる方が居るようなので、大丈夫ではないかと思っ
ているのですが、やっぱり予定より違う日に投稿するときはすこ
し心配です。

そして、今の章はバトルです、誰がなんと言おうとバトルです。な
かなかの字数書いてる割には、展開が大きく動いていません。展開
が速すぎても混乱を招いてしまうので、ローペースで書いてますが、
これはさすがに遅すぎますかね？

とりあえず、次回投稿は、今週の土曜日がお休みなので、来週の土
曜日、または来週の火曜日です。

第三章 たいせつなもの その3

深夜の駅近くの交差点に、黒い塊がある。

大きさは半径約五メートル、高さは二、三メートルといったところだろうか。

そして、その塊を見つめる男が一人。交差点を見下ろせるデパートの屋上に立っている。

身長約百八十センチ、見た目の年齢は三十前後、髪の毛は濃い茶色。目立った特徴は無い。傍から見れば、どこにでも居る普通の人。

彼は普通に生きていた人間だった。家庭を築き、子供は一人で男子。裕福と言えるほどではなかったが、それなりの幸せを手に入れていた、どこにでもある家庭。その中に暮らす、普通の人間。

彼は、と言つのもおかしいのかも知れない。正しくは、彼の本当の人格、本来この体を操るべき人格は、の方であろう。

少し昔の事を思い出す。現在の人格のものではないが、本来の人格の記憶は、こちらの記憶としても機能する。その思い出に、彼は口元が緩む。

「おっと、いかんいかん。俺は何のためにここへ来たんだ」
緩んだ口元を左手で隠す。

彼は左手を離し、見る。指を折り曲げたり、伸ばしたりする動作を五回ほど繰り返し、念入りに体に違和感が無いか、確かめる。

その後、納得したかのような顔をし、屋上から飛び降りる。二十メートルはあるだろう、デパートの屋上から。

勿論、彼の体は重力に従い、速さを増しながら落ちて行く。地面に到達するまで、十秒もかからなかった。

鈍い音が着地とともに耳に届く。本来なら骨折どころでは済まない。実際、彼の足はあらぬ方向へ曲がってしまったている。

だがそれは、彼が立ち上がるうとするときには元に戻っていた。見ての通り、彼は人間ではない。目立った特徴の無い彼の、特徴。

何故この能力を備わったかは、長くなるので説明はしないが、とにかく彼は生物の枠から逸脱してしまっている。

そんな自らの姿を、彼は気に入ってないのか、あからさまに不機嫌な顔つきをする。

「さて、そろそろだな」

黒い塊を見つめ、静かに、時を待つ。最も愛する人間と、壊し合う時を。

「うおら！」

カリバーンを振るい、三、四体の塊を斬る。手ごたえとしては、巨大なゼリーを切り裂いたみたいな感覚。

「キリが無いわね・・・」

どうすればこの状況を切り抜けられるのか、まずはそれを考えないといけない。

「そういや、あれは、俺まだ使ってなかったな」

総司さんに教わった事を思い出す。その中に、今の状況を打破できそうなものを見つける。

「あれって、なによ？」

「あれだよ、ストライク・クラッシュってやつ。どうにか出来るんじゃないかねの？」

昨夜コトナが披露してくれた光景を思い出す。あれだけの威力があれば、切り抜けられそうな気がする。

「だったら、今あなたが使うのは避けたほうがいいわね。どうせ後先考えず最大威力にするんだらうから」

そう言つて、コトナが一步前に出る。

「私に任せなさい。いくわよ、ストライク・クラッシュ！」

コトナは右手で持っていた刀を地面に突き刺し、スサノヲの眼を押す。

『Strike・crash!』スサノヲが応え、その刀身を紅く煌かせる。

「今度は遅れないようにしなさいよ!」

コトナが走りだす。その背中を追い、俺も走る。

「はああああ!」

コトナが黒い壁を切り裂く。すると、そこには人一人が通るには十分な穴が出来る。

「固まってたら同じことの繰り返しになるから、二手に分かれましよう!」

穴を通り抜け、コトナが指示をする。それに逆らう義理も権利も無いので、何も答えずにコトナとは逆方向へ走る。

後ろに注意を向けながら走る。黒い塊は半分ずつ分かれて追ってきているから、さつきよりか数は少ないけど、それでも少ないと言える数ではなかった。

とにかく走る。無我夢中で走る。それ以外のことを、脳が認識していないのか、息をしているのかさえ分からない。自分が声を出しているのかも分からない。

「あゝ。クソ!」

もう自分が何をしたいのか分からなくなってきた。一度思いつきり声を出してみる。

そして、急停止。塊のほとんどが、止まる事を忘れて、俺を通り過ぎる。

数メートル先で、塊の群れは止まる。

「一気に決めてやるよ!」

カリバーンの眼を押し、準備をする。半分とは言っても余裕で百は超えている。どれほどの程度だったかはわからないけど、さつきコトナが調整した威力で数十体は倒せるんだ。最大出力でやれば、大打撃を与えられるだろう。

黒の群れが、一斉に迫ってくる。

「ストライク・クラッシュ!」

『Strike・crash!』カリバーンが応え、刀身が翠色に煌く。

意識を、刀身に集中させる。そうすれば、出力は上がっていくらしい。事実、刀身の輝きは衰える事など知らないといった様子で、それを増してゆく。

群れの先頭が、俺の目前まであと数秒と言ったところまで迫る。

「ここだあ！」

カリバーンを振るおうとした、その瞬間。

「まて！」

正に刹那と言うのに相応しい瞬間だった。どこからか静止が入り、俺も群れも動きを止める。

しかし、それはほんの一瞬の出来事で、

「うわお！？」

カリバーンの刀身に集中していた光が四散した。俺を中心に、半径数十メートルまで、翠色の粒子が散っている。

「はあ・・・そんなに溜めるからだよ。馬鹿が」

黒い塊たちを掻き分けながら、一人の男が姿を現す。

「先程振りだな？ユウジ」

その姿を見て、突然動けなくなってしまった。蘇るのは、あの時の記憶。人が人を壊す、本当に単純で、曖昧な記憶。

その記憶の主役は今目の前に居る男で、俺の唯一の肉親。

勝道 正志。俺の父さんの名前だ。

「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

俺の様子に気付いたのか、父さんは自分の顔を撫でるように触りながら、俺に問う。

俺は、それに応えられない。答えようが無いんじゃない、答えることが出来ない。ただそれだけ。それだけのはずなのに、俺の中では混沌を呼び寄せている。

俺は喜んでいいのか、怒るべきなのか、はたまた悲しむべきなのか。それすらも判らなくなっていた。ただこの男が存在しているだけで、俺は混乱してしまう。

「おーい。聞こえてるか？ユウジ」

父さんは、ふざけているのか、俺の目前で手を振る。

「あ、ああ……」

一歩下がる。この場を切り抜けるのは、どうすればいいのだろうか？俺は何をすべきなのだろう。

思考が止まる。体が沈んでいくような感覚が俺を襲う。

前が見えない。何もワカラナイ。何も、なにも、ナニモ……

「おい！いい加減にしろよ！」

父さんが俺の顔面を殴る。左の頬がじんじんと痛む。

「俺はお前を壊しに来たんだよ！俺を楽しませろ！足掻いて見せろよ！？」

意味がよく分からない。何故俺は殴られたうえに説教されなければいけないんだろうか？

「父さん……どうして？」

自分でも何を聞いていいのか分からない。でも、疑問だけが浮かんでくる。その答えは、目の前にいる父さんが持っているはずなんだけど、自分が何を求めているのか分からない限り、答えを得る事は出来ないだろう。

「どうして？そんなもん、気持ちがいいからに決まってるんだろ？」

もちろん、こんな返答を望んでいたわけでもない。

「何が、気持ちいいんだよ……？」

とにかく自らの胸を占領している、この疑問を晴らしたい。だから、質問をする。

「もう分かりきってる事だろ。壊す事がだよ」

そう言っつて、父さんは地面に尻をついている俺を無理やり立たせる。「俺たちはな、衝動に駆られてるんだよ。自分だけじゃどうにも出来ない、衝動にな」

「衝、動？」

「ああ、そうだ。性欲でも睡眠欲でも、ましてや食欲なんかじゃない。壊欲。特に生きているものを壊すのが、最高に快感なんだよ」父さんは俺を突きつける。足元はおぼつか無いし、力も入らないけ

ど、このまま無様に倒れてしまったら、今度こそ殺されそうなので、力の限り立っておく。

「ただ壊すだけじゃダメだぜ？ 生きたいって欲望が対象から伺えるほど、俺の壊壊は満たされるんだ。だから、お前には足搔いて貰わなきゃ、俺が困るんだよ」

何を言っているのかさっぱりだけど、所謂決闘というものを要求しているのか？ こんなところで死にたくないが、俺は戦う気など微塵もない。

「生憎だけど・・・それは叶えられないかも。人と殺しあうなんて、人間のすることじゃない」

生きるか死ぬかの決闘よりかは、確実に生き延びる方法を探さない

と。
「はあ・・・ふざけやがって。そこはもつと熱くなって見せるよ？ こんなんじゃ誰が見ても面白くねえし、カツコつかねえだろうが」
父さんは、じれったいのか、頭を搔く。

「カツコつかなくても、生きるほうが大事だろ？」

俺も少し落ち着いてきた。皮肉にも、父さんの一発が効いたらしい。まだ頬が痛む。でも、それは生きている証なんだから、今はしっかりと噛み締めようと思う。

「ハッ。つまらん」

そう言っている父さんは、少しだけ嬉しそうに笑っている。

「これほどまで興ざめたのは、これまで生きてきて初めてだ。でもな、今日はどうしても抑えられないんだ。最悪全部壊せなくてもいいから、お前が壊れて苦しむ顔が見たいんだよ」

その笑みは、すこしづつ姿を変え、妖しいものになっていく。まるで、腐敗していくかのようだった。

「だから、少し前から準備させてもらった」

父さんは指を鳴らす。

その直後、待つていたと言わんばかりに黒い塊が集まってくる。その数は、先程とは比較にならないほど多い。

あつという間に俺と父さんは閉じ込められた。

「デスマッチってことかよ？」

確かにこれでは逃げる事が出来ない。

「それだけじゃないぜ？もっとお前がやる気を出すように、観客まで用意してやったんだ」

その言葉に、俺は心臓を打ち抜かれたような錯覚を覚えた。一瞬で、なじんだ顔が浮かぶ。観客は、リングに上がることはない。だから、コトナは完全に省かれる。なら、残った観客候補は、

「マミ？」

それに、父さんの笑みはさらに妖しさを増す。見ているだけで恐怖しそうなほどに。

第三章 たいせつなもの その3 (後書き)

遅れてしまつて大変申し訳ないです。豆腐です。

最近有限不実行になりがちですね。ホント反省してます。予定日にアクセス解析してみたら、十数人の方が覗きに來られました。投稿できなくて本当にすみません。

もっといい作品を上げている作者様からすると、少ない数に思われるかもしれませんが、それでも僕は数十人の方が來てくれただけでもかなり嬉しかったです。

また守る事は出来ないかもしれないですが、次回更新は日曜日になります。

今度は期待を裏切らないように、頑張ります。

第三章 たいせつなもの その4

「大正解！お前が戦わないなら、俺がこいつを壊すまでさ」

男は、青年に拍手を送る。

そして、拍手が終わると同時に、黒い壁の中から、一人の少女が出てくる。

「マミ！」

青年が叫ぶ。だがそれに、少女は応えない。どうやら気を失っているようだ。

「クソ！」

彼の顔は、憎しみに歪んでいく。今日の前に居る男は、父などではない。ただの狂人だ。人を殺す事に快楽を覚え、それに溺れた殺人鬼。もう、迷いは無かった。

「あんただけは！」

青年が、大剣を振るう。

「お、いいなあ。その顔。大切な女の子のために頑張りますって顔だ。あとは、俺への憎しみか？」

その大剣を、男は右手に持っていた短剣で受け止める。

音はしない。短剣と大剣は、ぶつかる寸前わずか数ミリで、止まっている。

「なんで!？」

彼は力をめいっぱい込める。それでも、刀身がそれ以上進む事は無かった。

「おもしれえだろ？神器つてのは、相手の存在を否定する兵器だ。

それがぶつかり合うんだから、触れなくて当然だろ。磁石で言うN極同士を引っ付けようとすると同じだな」

男は、余裕绰々といった様子で、彼を嘲笑する。

そして男は、彼の腹を目掛けて足を飛ばす。

「っつ!？」

鉄球でも腹に当たったのかと思った。それほどの衝撃が、彼を襲う。二メートルほど後ろに飛ばされ、膝をつく。

「う、うぼえあ」

堪らず嘔吐してしまう。口の中に残ってる酸味が、さらに気分を悪くする。

「そんなもんかよ？ユウジよ」

男は、手を叩き、彼に戦う事を催促する。

「う、うっせえよ」

蹴られた痛みは、消える気配がない。彼は左手で腹を押さえながら、立ち上がる。

「いい目だ。もっとだ、もっと俺を楽しませろ」

男は両手を引いて、来いという命令のジェスチャーをする。

「ママは関係ないだろ！？どうしてこんなことすんだよ！？」

青年は、再び男に向かって走る。

「決まってるだろう？楽しむためだよ」

男が先に仕掛ける。カリバーンを振りかぶっている彼の腹に、短剣を投げる。

「ぐふう……がはっ……！！」

彼は吐血する。投げられた短剣を引き抜こうと柄を握るが、その握った手をも短剣は否定し、破壊する。

「う、うう、ああ！！」

苦しむだけで言葉にならない。彼の体の中にある神器細胞が、傷を癒そうと彼の体を修復するが、その腹に刺さっている神器は、さらに破壊しようとする。修復と再生のループ。蜘蛛の巣のように、纏わりつき、振りほどこうとすれば、さらに絡まる。負の連鎖。

「いいなあ！恐怖、憎悪、それすらも凌駕する苦しみ！もっと見せてみるよ」

男はさらに深く、短剣を突き刺す。

「……っ！！……っ……っ……っ！！！！」

彼は叫ぶ事も出来ず、顔を歪めるだけで、

「もつと、もつとだ！」

短剣を傾ける。空いた腹の隙間から、鮮血が漏れる。

それに、彼は口を大きく開け、叫ぼうとする。だが、それは叶わない。

「おつと、少しやりすぎたな。まだ完全に壊れてもらっちゃ困る」
そう言つて、男は短剣を引き抜く。

彼の傷口は、二十数秒で塞がってしまう。その様子に、男は関心する。

「ふむ、最近の神器は性能がいいのか？回復が早い」

彼は、再び嘔吐する。血が混ざっているので、少し不気味な色をしている。

「うえ・・・クソ」

カリバーンを杖代わりに、彼は立ち上がる。

どうにか彼女を救い、この状況から逃げ切れる案を考えねばならない。今の彼では、どうやってもあの男に勝つ事は不可能。

これが現実でいいのだろうか？彼は疑問に思う。自分で選んだ道ながら、大きく後悔する。

諦めるな。などという言葉をよく耳にするが、彼はそんな言葉が嫌いだった。諦めないで頑張ろうとも、無理なものはある。むしろ、無理である場合のほうが多い。だったら、保険をかけた方が絶対いいに決まっている。人生は諦めることが重要なんだと、彼はそう思っている。

「父さん」

彼は男に言葉を投げかける。

「なんだ？」

ここでの選択は幾らでもある。相手を油断させて隙を突く。このまま殺されるくらいならいつそ自分でやったほうがましだと考え、自殺する。幼馴染の身を捨ててまで、自身の身を守る。狂人と化し、ただひたすらに暴れる・・・

どの選択も、多かれ少なかれ必ず一つを選ぶものが居るはずだ。

その選択の中で、彼が出したものは、
「もう、やめてくれ・・・俺には、もう無理だよ」
諦めだった。

午前三時四十七分。

「やめてくれ、ねえ」

俺の父さんは、短剣の先を指でつついている。

「せめて、ママだけでも開放してやってくれよ。あいつには、まだ日常を生きて欲しいんだよ」

涙が俺の目から零れる。もうそこに、憎悪と言う感情は無く、ただ淡々と、黙りこくった恐怖が俺を支配していた。

「はあ・・・そうじゃねえって言ってるだろ？お前には新鮮なままで壊れて欲しいんだって」

そんなことは分かっている。でも、抵抗したところで、かなう筈もない。

「だってさ、俺にはまだ足掻くだけの力すらないんだぜ？だから、父さんの要求には、応えられない・・・」

こんな自分を、惨めだとは思う。守りたいと思っているものでさえ、守れない。そんな自分はとても惨めだ。でも、悔しいという気持ちは、無かった。だから強くなるうなんて、思えなかった。だって、もし仮に強くなっても、それは？人？としての強さじゃないような気がするから、人というレベルから、完全に脱線してしまいそうな気がしたから。

「そうか。確かに、今のままじゃ役不足だな。仕方がない、帰るとするか。それに、そろそろお前のお仲間が来る頃だ。二人同時に相手にするのは、さすがの俺でも些かキツイからな」

そう言っつて、少し困ったような笑顔を見せながら、手元の短剣を、地面に落とす。すると、それは男の意思に込えているかのように、姿を消す。

よかった。俺は安堵感に覆われる。心に、余裕が出来た。

「ありがとう・・・父さん」

「だが、こいつはお前の手で救ってやれ。それが出来ないなら、お前は所詮その程度だつてことだ」

俺は、父さんに感謝を告げたくもりだった。俺と、真美を助けてくれてありがとう。そういつたつもりだった。それなのに、父さんは俺を裏切った。俺の心を、踏みにじった。

「喰らえ、壊せ」

そついい残し、父さんは姿を消す。

真美は、漆黒の壁に沈んでいく。それと同時に、壁は形を崩していく、形を変える。

ザザ・・・ザザザ・・・

ノイズが、俺の頭の中を走る。でも、それまでのものとは違っていた。まだ二回しか経験していないけど、明らかに違う。今までのノイズは、聞こえるか聞こえないかの、かすかな音で、聞いているだけで不快感に苛まれるものだったが、むしろ今聞いている音は、とても聞き取りやすく、心地よかった。

ぴギイああああああああああああああああああ！！！！泣き声が、響き渡る。その声は真美のもので、精一杯の悲痛で、そして、今日の前に居る、敵の叫びだった。

第三章 たいせつなもの その4（後書き）

また遅れてしまいました・・・

最近有言不実行すぎますね。だれだよ、日曜に上げるなんていった奴は。

僕は此処にいます。まだ失踪予定はありません。この作品は何とか完結の形までもっていききたいので。

次回更新は、来週の土曜日予定です。

もう自分でも予定日守れるか不安ですが、待つてくださる方が居れば、幸いです。

第三章 たいせつなもの その5

ヴぁアアあぁあぁあぁアアアアアアアアアア!!

胎児が腕を振り下ろし、俺を叩きつけようとする。

それを、少し左に移動して、避ける。

「あつぶねえ・・・」

コンクリートにヒビが入っているのを見て、冷や汗なんかをかく。もし避けることが出来なかったら、俺はこの亀裂の一部と化していただろう。

そう思うと、股間の辺りが寒くなる。

楽しい。これがスリル。退屈に生きていた俺が求めていた、非日常。カリバーンを振り下ろされた手に叩きつける。

うヴぁヴぁあぁあぁ!?

悲鳴が上がる。とても耳障りだった。

叩きつけられた手からは、黒い液体のようなものが溢れ出る。それが肌に触れると、冷たい感触だけが残り、それは消えてしまう。

何故だろう?この感触は、凄く気持ちいい。よく分からないけど、これをもっと味わいたい。この感触を少しでも長く、一回でも多く、貪り尽くしたい。

カリバーンを持ち上げ、もう一度叩きつける。

やはり気持ちのいい液体が飛んでくる。

もう一度、叩きつける。

気持ちいい。

もう一度。

気持ちいい。

何度も何度も、その感覚を味わう。悲鳴を上げ、のた打ち回っている胎児を見るのも、なんだか楽しい。

これ以上は勘弁して欲しいのか、もう片方の手が、俺を吹き飛ばそうと飛んでくる。

俺は快樂に浸っていたので、それに気づくことが出来なかった。

「なんなのよ！これは！？」

そう言いながら、叩こうとした手を切り落とす。

コトナが、俺をフォローしてくれた。

「ああ、遅かったな」

「遅かったな。じゃないわよ！」

コトナは俺の手を引き、胎児と距離をとる。

「アナタ、何かあったの？」

コトナは心配そうに俺の顔をうかがう。

「いや、別に？」

特に思い当たる節もなければ、疑われるようなことをした覚えはないので、そう応える。

「そう。案外、危ない人だったのね。アナタ」

コトナはスサノヲを構える。

危ない人。その言葉に少し引っかかりながらも、俺もカリバーンを構える。

「とにかく、規模の割にはランクは高くないようだし、一気に決めるわよ」

「あ、ちよつと待って」

俺は、アレに向かって走り出そうとしたコトナを止める。

ここで一気に決めさせてはいけない。なぜなら、あの中には真美がいるんだから。

「なによ？」

「あの中にはママがいるんだ。まず助けてからじゃないと・・・」

それに、コトナは少し納得がいかない、と言う顔をして、

「じゃあ、何であんなことしてたのよ・・・」

頭を抱える。

「あんな事、って何だよ？」

俺は、思い当たる節がないので、素直に質問を返す。

「もういいわ。とにかく、あの子を助けないとね」

何が気に入らないのか、不機嫌な顔をする。

「あ、ああ。多分、頭のほうだと思う」

このあと、真美はどこら辺にいるか聞いてきそうだったから、先に応えておく。

「あら、随分要領よくなったわね。分かったわ。じゃ、私があいつの四肢を破壊するから、その隙にあの子を助けなさい」

胎児は、ろくに歩けないのか、立ち上がるうとするも、頭から倒れるだけで、一向に近づく気配がない。

「行くわよ。ストライク・クラッシュ！」

左手に持っていたスサノヲを地面に突き刺し、その眼を押す。

すると、右手に持っていた刀が、紅く光り始める。

「走りなさい！」

右腕を振りかぶり、それを振るう。それにあわせて、俺は走り出す。

「すぐ再生するんだから、さっさと済ませなさいよ！」

その言葉を背に受けて、もっと力を込めて走る。これ以上早く走れない。と言うくらいに走る。

距離はそんなに無かったので、すぐに到着する。

俺の目の前には、手足を失った胎児が転がっていた。

その頭に飛び乗り、赤く光っている眼を足で踏み潰す。

ぶにゅつとした感覚が、すこし気持ち良かったが、今はそれに浸っている暇はない。

両目を潰し、おでこの辺りに、カリバーンを突き刺し、切れ目を入れる。

その切れ目に手を突っ込んで、両手でこじ開ける。

「う、おおおおおおおおおおお！！！」

中から黒い液体が噴出される。それを浴びるのが、かなり気持ち良かったが、それにも、浸っている場合じゃない。

深く、右手を入れてみる。

微かにあつたかくて、ヌルヌルしている。でも、すんなりとは入れたくないのか、内部から再生が始まっているのか、肉を破る感覚

が、手から感じられた。

例えるなら、蒟蒻を手で突き破っている感触。

もつと深く。もつと深く。もつと、もつと、もつと……

硬いわけではないが、再生が早く、押し戻されそうになる。

あと少して届きそうな気がするのに、その少しが足りない。体が揺

れる。どうやら、四肢の一部が再生したらしい。でも、揺れるだけ

なので手はまだ再生してないようだ。

「届つけええええええええ！」

精一杯力を込め、腕をメいっぱい伸ばし、真美を探す。

そして、人の肌の感触にたどり着く。

「あつた！」

背中から強風が吹く。どうやら手も再生したようで、俺を叩き落とす気らしい。

「クソがああああああああ！！！」

右手を思いつきり引く。このままではカリバーンが邪魔になりそうなので、カリバーンを突き飛ばす。

揺れが大きくなった。もう手足は完全に再生しきったのか。

手も俺の背中をかする位に届くようになった。

掴んだ手は裂け目から出ていたので、両手を使って引き抜く。

手は俺を叩こうと、もう真横まで来ていた。

「ああああああああああああああああああ！！！」

俺の体を、手がそつと触れる。

そしてその後、手は力なく地面に落ちる。

「ま、間に合った」

足場が悪いので、バランスを崩した俺は尻餅をついて、真美を抱きしめていた。

胎児が、霧散する。

重力に逆らう事なんて、勿論出来ないの、そのまま落下する。

痛いなんてレベルじゃないくらいの衝撃を受けながら、俺は尻から地面に着地する。

でも、痛みなんて、どうでもよかった。
今は、このたいせつなものを守れた嬉しさで、いっぱいだったから。

第三章 たいせつなもの その5（後書き）

しばらく更新は止まります。

というのも、一週間で一話を仕上げるのは、自分の性に合わないというか、いろいろ間に合わなくなってきたので、二ヶ月ほど書きだめしてから、投稿したいと思います。

自分勝手に本当に申し訳ないとは承知していますが、こんな僕をどうか許してください。

本当に申し訳ありません、次回更新は、二ヶ月後予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497w/>

Knight of Night 聖なる騎士の物語

2011年12月24日01時57分発行